
ノーグ・コンフェクショナリー

久藤雄生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーグ・コンフェクショナリー

【Zコード】

Z3375T

【作者名】

久藤雄生

【あらすじ】

藤村貴人は巻き込まれ事故で、同じ学校の生徒4人と共に異世界ノーグに召喚された。

帰る術はないらしく、貴族に引き取られ生活することになるのだが

……。

日常淡々異世界生活。

0 · 00 Hello, ZOG

ひとりのわかもの よ
救世主を喚んだらしいけど、現れたのは5人の男女。

「ふざけてんじゃないわよー。さつさと家に帰してー。」
激昂する同級生の女子。

「……………ツ」

弱弱しく涙を流す下級生。

「すっげー、魔法って俺でも使えるんすか?」

メモを片手に嬉々として質問を投げかける後輩。

「もつと詳しく説明しろよ…………」

困惑した様子で詳しい説明を求める同級生男子。

それらをただ見てるだけの俺。
感情がついていかない。

怒りもなく、悲しみもなく、喜びもなく。
これが確かな現実なのか、それがわからない。

いや。

ああ、そつなんだ、としか思えない。

それから王だと魔術師だと魔女だと色々出て来て何か話していたが。

何だか頭に入つてこなくて、ただ、ぼんやりと見ていた。

取り敢えず今日は休んだ方が良いと案内されたのは、二部屋続きの部屋だった。

入つてすぐはテーブルや椅子のある、食事をしたり談話する一番広い部屋。

次の部屋を男子が、一番奥の部屋を女子が、それぞれ使うことにした。

この世界に来たとき持つていた物はそれぞれの部屋の隅にまとめた。勿論携帯が使えないことなど一番最初に確認済みだ。

ベッドには泣き疲れた春日が眠つており、2人は起こさない様にそつとバルコニーに出た。

夜風が気持ち良い。

ふと空を見上げると二つの月。

青白い月と赤い月。

異世界、か。

ぼんやりと月を眺める。

「フジム、聞いてた？」

「聞いてた。全部右から左だけど」

「駄目じやん」

「うん」

呆れたように真琴が呟く。

頭がついていかないって「ううう」となんだな、と思つ。

「どうなっちゃうんだろうね」

「さあ」

わからない。

「他人事だね」

「何というか、感情が追いつかない？」

「ふうん、意外」

「お前はもう落ち着いたみたいだな」

「ま、ね。私がしつかりしなきや、春日ちゃんも不安でしょ」

室内で眠る春日を眺めながら呟く。

相変わらず面倒見がいいというか何というか。
春日が後輩で女子だからだろうか。

自分だつて、現状を不安に思つてゐるだらう。

気を紛らわせるため、他愛のない話を交わす。

学校のこと、部活のこと、バイトのこと。

そうしてくるついで春日が田を見ましたようで、部屋に戻る」と

した。

「春日ちゃん起きたし、一旦階で話そつよ」

男子2人がいる一番広い部屋に移動する。

これからのこと話をなくては、というのが真琴の弁だ。

全員が円形のテーブルにつく。

紅茶らしきものがあつたので、5人分淹れる。

「ま、自己紹介って言つてもさ。大半が顔見知りなんだけど
茶に息をふきかけ、冷ましながら飲む。

うん、普通の紅茶みたいだ。

全員同じ高校に通つているので、顔見知りなのは間違いない。

「じゃあ私から時計回りでね。体育科2年の早良真琴。さわら まいこ 全員顔見知りだけど一応ね」

真琴とは中学で3年間同じクラスだった。

それもあって、今でも交流のある数少ない女子のうちのひとりである。

意思の強そうな目、長い髪をポニー テールにしている、（色んな意味で）男子にも負けない気の強いヤツ。

「……及川、おいかわ 光太郎。進学科の2年で、剣道部」

及川は校内で有名人なので、話したことはないが顔と名前は知っている。

確か生徒会副会長でもあり、剣道部では副主将。

顔立ちも良いため、女子の人気が高いのだ。

クラスの女子が話していたのを覚えている。

「進学科1年の富尾滋郎みやお じろう っす」

ノッポな眼鏡の割に茶髪といつこの後輩も、中学の時に知り合つた。高校に入つてからはバイト先でもある兄貴の店で、毎日のように顔を合せている。

ゲームや漫画、小説が好きで、よく語られる。

最もマニアック過ぎて話の半分もわからないのだが。

「調理科2年、藤村貴人ふじむら きいと」

別段言つことはない。

部活はしていないし、バイト先を言うのも何か違つ。

「英語科1年の春日かすがみなみです。よろしくお願ひします」

頭を下げたことで、ふわりと長い髪が揺れる。

そういうえば今年の英語科1年に美少女がいると噂になつていていたことを思い出す。

小さくて華奢で、何かぽきっと折れそうだ。

「さてまずは現状把握ね」

言いながら、大きく溜息をついた。

「私だと疑つた言い方しか出来ないし、ジロ、お願ひ」

「俺つか。えーと、フジム先輩、話聞いてなかつたすよね」

「聞いてたつつの」

右から左なだけで。

「はいはい、聞き流してたんすよね。じゃあ詳しく述べましょっか」「ひどい後輩である。

滋郎は眼鏡のブリッジを押し上げて、おもむろに口を開いた。

「ここは日本ではなく、ましてや地球でもない、『異世界』。そこに俺達は“召喚”されました」

あれだ、コイツの好きそうな設定だな。

いつもの語りを聞いているのだと錯覚しそうだ。

「本来は一人召喚されるはずだったのが、周辺にいたことにより巻き込まれたようつす」

確かにここに来る直前、5人とも渡り廊下にいた。

突然光の渦に巻き込まれたので、あまり細部までは見ることが出来なかつたが。

「誰が召喚される筈だつたんだ？」

問いかけるが、滋郎は首を横に振つた。

「異世界からやって来たひとりの若者が、ヒーラン国の助けになる”とい

う言い伝えがあるそいつす。何でも“アカの英雄”が残した予言だとか

何だその傍迷惑な云い伝えは。

そしてその根拠は？

世紀末の世界滅亡くらい不明瞭じやないか？

「それで今回、“宫廷魔術師”と“魔女”が協力して“召喚術”を行なつた」

そこまで言つたところで、春田が目を伏せた。

「日本に帰るための“逆召喚”は“不可能”」

そうだった。

それで春田は泣いてたんだつた。

「生活の保障は十分にされるよつですが、^{ハシラク}“若者が国を救つようこ働く”のが前提つすね」

「具体的には？」

「現在東隣の国が、海を挟んだ東の国と戦争をしてゐるよつです。そのどばっちりを防ぎたいそいつすよ」

「阿呆じやねーの。ふつつーの高校生が戦争に役立つわけねーし銃器が身近にあつたり、兵器を作れる専門家なわけでもない。全員日本人だし、戦争を生で見たことすらないのだ。戦争といえば人が死ぬだらうじ、そんな場面に耐えられるとは思えない。

「そうつすね。ただこの^{一ヶ}世界には、“魔法”があるそいつす」

「は？」

「異世界間を渡ることによつて、それが急激に増幅されるらじくへは？」

「俺達全員、魔法の才能があるそいつす」

説明が終わつた。

今日は休み、明日の午前中から色々検査とか説明とかあるらしい。
「そういえばさ、何年か前に商業科の生徒が行方不明になつたよね。

それも5月」

「何か聞いた覚えあるわ。まだ見つかってないんだろ?」

「うちの学校、呪われてるんすかね」

噂で聞いた程度だが、数年前の5月、商業科1年の女子生徒が行方不明になつたらしい。

確かGW中で、学校での神隠しではなかつたと思うのだが、
その噂から何故か学校の七不思議に脱線する。

きっと今年から渡り廊下の神隠しが追加されるに違いない。

「ちょっと、いいか? ……提案があるんだけど」

及川が重々しく口を開いた。

「何?」

「……救世主は誰かわからない、だつたよな?」

真琴が頷く。

「もしも、明日の検査つてやつで救世主が誰か特定出来ないなら」

「その時思つたのは。」

「俺を救世主にしてほしい」

「こいつ、大丈夫か?
つてことで。

いや、うん、すっげーいい奴だな、及川つて。

翌朝。

水を貰い顔を洗つた後、支給された服に着替えた。

麻のような素材で、襟元が緩めの服だ。

下もゆつたりめなズボンで靴は柔らかい革靴。

動きやすそうだ。

女子は女子で白のワンピースなのだが、嫌がつた真琴はレギンスの
ようなものを履いている。

「普通で良かつた」

「そうつすね」

確かに普通だ。

元の世界でもあつそつナチュザインで、違和感はない。

着替えが終わり、食堂に移動する。

この世界初の朝食は、シリアルもどきだった。

ミルクじゃなくて白湯だし、しかも薄ら塩味である。

残念ながら好みじゃない。

パフェの底に入っているとつい残したくなるくらい、好みじゃない
のだ。

さりげなく周りを見ても誰も何も言わず、もくもくと食べている。

お前ら、不満はないのか。

気に食わない朝食をもそもそ口に運んでいると、若い男が現れた。
何となく昨日もいたような気がする。

後輩がこいつそり耳打ちしてくれた。

男の名前はエドワード・カネル。

魔術師らしい。

昨日名乗つてましたけど、聞いてませんでしたよね、って一言多いんだよ。

「今日はまず、魔法の適性を調べようと思います。朝食を終えたらさつそく始めましょう」「う

シリアルもどきを無理やり胃に詰め込み、ミルクと果物で口直し。朝は米がいいんだけどな。

藤村家の普段の朝食は、和食が基本である。

女子が食べ終わるのを待つて、部屋を移動することになった。

昨日の召喚があった部屋とは別で、3列の長机とそれぞれ5脚の椅子がある。

パイプ椅子じゃなくて木製だけど、学校の多目的室みたいだ。魔術師に促され、全員揃つて最後尾に座る。

椅子に座ると、白い石が配られた。

よくわからないが白い石を握り、力を込める。

そうすれば属性によって色が変わる、というものらしい。

白い石は片手で握ると隠れるくらいの大きさだ。
それを握りこみ、力を込める。

力を込めるといつても、物理的な力ではない。
力を流し込むようなイメージ、らしい。

まあ実際は魔力を流すらしいのだが、そんなもん知らん。
何事もやってみないとわからない。

しばらくすると石がほんのり温かくなってきた。

そつと開くと白い石がマーブル模様に変化していた。
周りの様子を窺うとやはり皆マーブル模様のようだ。
「さすがですね、世界を渡るところも違うのか……」
この世界では、人間ならば誰しも魔法が使えるという。

火・水・風・地・光の5属性があり、大抵一人一つ適性がある。勿論中には複数の適性がある人もいるらしいが、割と珍しい。

このハードワードという魔術師は、珍しい3属性持ちなのだそうだ。が、この世界では魔法と魔術は別物らしく、この男は魔術師であつて、魔法使いではないのだと言い張る。

「中でも光の属性は稀少です。……ほつ、5人中3人もいるとは」光というだけあって、イメージ通り黄色らしい。

貴人と春日以外の3人の石は、黄色の混じったマーブル模様だ。ちなみに貴人の石は青、水色、赤の混じった3色に見える。

「つうかお前のすげえな」

滋郎の石はそれはもう見事に5色混じっている。

「ほほう。もしやあなたが救世主なのでは」

「いやいやいや、違うつす。俺より及川先輩の方が断然強いっす」

滋郎が顔の前で手を振りながら答える。

「及川先輩？」

及川に興味を持つたらしい魔術師が、手元の石を覗き込む。

及川の石は黄色・赤・緑の3色だ。

魔術師はそれぞれの石の色を書き込んでいるようだ。

紙は再生紙のような薄茶色、ペンは万年筆のような形のものを使用している。

「及川先輩の剣は国で一番といつても過言ではない腕前で」

実際、及川は去年新人戦で優勝している。

魔術師の意識は及川に向かつたようだ。

この調子なら順調に及川を救世主にもつていけるのではないだろうか。

「……そう、正義感も強いから、向こうで代表もしていたし嘘ではない。

今月末の選挙で、及川はおそらく生徒会長になつていたはずだ。

お、魔術師がその気になつてきたみたいだ。

言い伝えに根拠はないし、救世主が誰かもわからない。

そもそも救世主が本当にいるかどうかもわからないような状況なのだ。

それらしければ誰でも問題はない。

結果オーライ。

「俺で良ければ力になります」

魔術師がその言葉に目を輝かせる。

及川の手を掴んだかと思うと、ぶんぶんと上下に振った。

「ありがとう！ 早速師たちに報告に行つてくれるよー！」

バタバタと遠ざかる足音を聞きながら溜息を吐いた。

「行つたな」

「上手く行きそうですね」

「そうね」

及川が救世主になると語った理由。

それは、女子2人を守るため。

このまま救世主が決まらなかつたら、全員戦場に行く可能性があるので、という考えに至つたらしい。

男子はともかく女子が戦場だなんて、ところどころじい。

及川、すげえ。

でも本音は駄々漏れだけどな。

この状況でそこに考え至つたこともそうだが、それで自分が犠牲になろうというのだから恐れ入る。

実際その状況になつて実行に移せるやつは早々いないだろ？

「……ごめん」

真琴が眉を潜めてほつりと呟く。

「謝んなよ。俺が選んだことなんだから」

「……ありがとう」

男前だな及川。

魔術師が関係者を数名連れて戻ると、及川が別室へ移されることになつた。

救世主なので訓練などの苦労もあれば、優遇もされるということだ。及川はこのまま王宮住まい、騎士団に混じつて訓練に参加など、忙しくなるらしい。

そして残りの4人がどうなるかだが。

「まずは大陸共通語の学習ですね」

「……え？」

「関係者の一部は翻訳魔道具を身につけていますが、皆さんに配布出来る量はありません」

言いながらエドワードは左手親指の指輪を掲げる。
黒い石のついたその指輪が、翻訳魔道具なのだろう。

「ですので、王宮にいる間に共通語の学習をして頂き、その後しかるべき後見人に引き取られるという形です」

「ちょっと、引き取られるってどういうこと?」

「そのままの意味ですよ。理由なくこのまま王宮に住むことは出来ません。それなりの地位を持つ貴族に後見してもらい、その屋敷で保護されることになります」

「それって皆一緒にやらないわよね?」

エドワードは首を横に振る。

「無理でしようね」

まあそだうだう。

4人も一氣にお荷物抱えるとかどんだけだ。

「共通語の学習に加え、常識や文化などの知識も必要ですし、基本魔法の勉強も必要です。もし何か他にもやりたいことがあれば申し出て下さい」

「えーっと、俺ら元の世界じゃ 学生だったんすけど、いっちじゅう
うなるんすか？」

「こちらの世界では成人後に通う学校はありませんよ」

「へ？」

「こちらの学校は未成年しか通えません」

言い方がまずかったと思ったのか言い直された。

だけど滋郎が聞き返したのはそういう意味ではないと思つ。
そもそも……。

「この世界の年の取り方は？ で、何歳で成人？」

「ああ……24時間で一日、30日か31日で一ヶ月、12ヶ月で
一年。そして1年で1つ歳を取り、16歳で成人ですね」

成人年齢以外はほぼ同じか。

16歳で成人。

それだと1年生2人はおそらく未成年である。

よく海外では日本人は幼く見られるというが、ここではそんなこと
ないらしい。

まあ海外じゃないけどな。

「皆さん成人されますよね？」

これで1時間の長さが違うとまた狂つてくるが、まあいい。
成人に見られるってことは成人してるんだろう。

「俺はしてるみたいですね。春日さんは？」

「わ、わたしはまだですが、学校はちょっと……」

緊張しているのか、か細い声で答える。

「ではやはり学校は通わないということで。貴族の多くは18歳く
らいまで働く、社会勉強をすることがよくあります。皆さんもと
りあえずそうされではいかがでしょう？」

約2年か。

いきなりじゃあどうしたい？などと言われてもわからない。

猶予があるのは助かつた。

「それでは、今日は立ち入り出来る場所の案内ということで、明日

から講義を致しますね。講師は私が勤めます。ビツヤーにエディ

とお呼び下さい」

そう言って魔術師はこいつと笑った。

適性検査終わった後、城内を案内してもらひ「ことになつた。

及川は早々に別室に移動となり、4人だけだ。

説明を受けながら散々歩きまわって、昼食を挟み、5時間以上掛かつたのではないだろうか。

滋郎が質問しまくるものだから余計に時間が掛かつたのだと思つ。あのメモの内容が気になる。

アイツは常に片手にメモ。

普段何書いてるんだ。

夕食後から就寝まで学習時間らしい。

あまり時間に余裕がないようだ。

与えられている部屋の一室で、授業が始まつた。

今日は語学そのものではなく、予備知識を習つといつ。

この国で主に使われているのは大陸共通語。

エトランのある大陸の名前をウナカーサといつ。

ウナカーサ大陸共通語。

他にも大陸はあるようだが、大陸と言えば一番発展してゐるウナカーサを指すらしい。

この大陸は上を向いた三田円のような形をしており、エトランは切れ目から西2つ田に位置する。

切れ目から西1つ田が問題の国である。

逆にエトランの西の国はリダインと書じ、いかりとはほとんど関わりがないらしい。

「その翻訳の道具、もつとあればいいのに……」

授業の合間に真琴がぼやく。

視線はエディの手元である。

翻訳の魔道具を持つのは王族や魔術師の一部、割と上層部の人間か、自分たちの専属侍女たちだけだ。

即ち後見人となる貴族は勿論、買い物するにも店の人間と言葉が通じないのである。

「高価な上に制作にとても時間が掛かる物なので……手に入る頃には必要なくなつていいでしょうね」

そんなにか。

「諦めて勉強した方が良いつですよ」

「ぐう……ジロに言わると何かムカつく」

「ははは、それでは続けますね。……エトランは大国です。資源も豊富ですから、他国から欲しいと思われてもおかしくない」

「資源つて何ですか？」

「これです」

卓上にあつたランプの下部から石を取り出した。
あの白い石と色が違うだけの、ただの石に見える。

「灰色……」

「ええ、魔動石といいます。このランプでこうといふのですね。こ

「に石をいれて、それを動力にして灯りがつく、といつわけです」

石油や電池といった役割か。

「廊下のランプにも石が入っています。数日」とに入れ替えてますのでそのうち見ることもあるかもしませんね」

数日で交換なんて面倒だな。

電気は通っていないのか?
って存在しないのか?

「国内のエネルギーはその魔動石だけですか?」

「そうです。個人の魔力を使つことも出来るのでしょうか、とても間に合いませんからね」

部屋にはポットのようなものもあつたし、元の世界でいう家電も割と開発されているのだろう。

照明、調理器具、洗濯、掃除、移動手段などなど。

どれだけ普及しているかはわからないが、そうなると間に合わない

という発言も納得できる。

初授業が終わり、一息吐く。

エディは退室し、部屋には自分たち4人だけだ。

「どうなるのかな……これから」

真琴が呟く。

「大丈夫ですよ、どうにかなりますって！」

「……アンタは楽観的でいいわよね」

「」している滋郎を真琴は横目で睨む。

「ホラ、茶あ入つたぞ」

厨房から頂いてきた焼き菓子を茶請けにティータイムだ。この世界の焼き菓子も元の世界と変わらないようで安心した。

「ありがと、フジム。……ジロと違つて気が利くわあ」

「えー、ひどいっすよー」

その遣り取りを見て、春日が微かに笑った。

この世界に来て初めて笑顔を見せたのではないだろうか。でもあれだよな、きっと春日の反応が“普通”なのだ。

「及川先輩には申し訳ないっすけど、俺らは俺らで身立ててかな
いと」

「大丈夫なんでしょうか……」

春日が不安げに呟く。

「後ろ盾があるのならどうにかなります。及川先輩次第な」といふは
あります

「他人に全部負んぶに抱つこなんて、性に合わない」

滋郎の言葉に真琴は眉を顰め言い捨てる。

真琴ひし

「それならそうならないようにすればいいんじゃないつか」

「……………やうになつたんだが、おまえが」

あひをつと言ひ滋郎。

普段の明るい表情に戻った。

二〇

バルコニーに出て息を吐く。
月が大きく、赤い。

「異世界ねえ……」

事実は小説よりも奇なり、か。
室内では3人とも就寝している。

「店、大丈夫かよ……」

元々そう大きな店ではなく、従業員もぎりぎり。

その中から主戦力である自分と滋郎が抜けてたぶん店は忙しく。
2人ともほぼ毎日働いていたのだ。

店長が身内だと中々扱き使われるものである。

「寝るか……」

夜風は気持ち良かつた。

翌日は午前中から授業。

みっちりである。

とにかく詰め込みと言わんばかりに授業は進む。
学校で習う外国語と違い、モロに生活に影響してくれる。
日常の生活で身につくものも大きいだろう。

よく使う単語さえ覚えていれば割とどつにわかるもんだ。
春日の提案で単語カード作りに勤しむ。
こぞとなればこれを見せれば通じるだろ?とこいつこと。

ちなみに服は色々もらつたので、それぞれの制服はきちんと保管してある。

毎日2~4時間、制服をきているというわけではない。

こちらの服も元の世界の服も大きな違いはなさそうだ。

普段着に関しては落ち着いた色が多いが、ドレスや騎士服は派手な色合いのものも見掛けた。

昼食はオープンサンドとサラダとスープ。

使われてゐる食材は至つて普通（に見える）。

サラダは……ホウレンソウか？

生のホウレンソウに玉ねぎときゅうり。

オープンサンドはトマトスライスにチーズ、ハムと至つて普通。スープはトマトスープのようで、細かく刻まれた具が色々入つている。

「……米？」

「だな」

スープには米が入つていた。

見慣れてるものより長細い感じがするけど。

だがしかしれっぽっちの量だと雑炊ではない。

「Hトロイさん、『の白』のつて」

「それですか？ 米はスープやサラダによく使われる食材ですよ」

Hトロイは指輪を嵌めているので、米は元の世界で使われる米と同じことだよな？

指輪を外すと違う単語に聞こえるのだろうが、米は米。

「どうせなら単品で食べたいんだけど」

真琴の提案に一同頷く。

「単品？ ですか？」

「炊いた米が食べたい」

「えーっと、」の国の料理でせありますかが、ペリペリ、でじょうつか
？」

「ペリペリでもなんでもこっす。とりあえず、飯ものが食べたいっす

同意。

米があるなら米が食いたいよな。

今はまだ良つけど、そのつけ麺絶対恋しくなるつて。

「わかりました。夜はペリペリにするよ！」

「やった！」

「さて、それでは続きをしまじゅうか。夕食まで、頑張りまじゅう
ね」

「鬼ー！」

「あ、そりゃ。」れは文字の練習帳です。自主勉強にお使こづき
い

「つて、またこれがよー。」

「どうやらこの薄塩シリアルもどき、朝食の定番らしい。
勘弁してくれ。」

「あー、Hディさん？ 明日から朝食変えてもらえないっすか？」

先輩の我慢がきかないようです、と続ける。

失礼な。
だが事実なので否定はしない。

「どんな朝食が良いのですか？」

「うちはパンだなあ。トーストに目玉焼き、ベーコンと野菜とか」「
あー、俺んちもパンっすね。って言つても総菜パン1個置いてあるだけっすけど」

真琴と滋郎はパン食か。

「あー、白米と味噌汁に弁当のおかずの残りとか」

学校に弁当を持参していたため、どうしてもおかずが残る。
基本的に朝はそれを食べ、おかずが少ない場合は何か足す。
さすがに自分一人のためだけにわざわざ朝食を作るのは面倒だった。
朝からバイトの時はバイト先で賄いが出るので問題なかつたし。

「米でもパンでも良い。」これだけは止めてくれ……」

シリアルもどきを指差して言った。
エティは楽しそうに笑いながら頷く。

「明日から違うものにしましょう。では朝食後、魔法の適性を調べた部屋でお待ちしております」

1日みっちり勉強した。

言葉は勿論、時間の概念や時計の読み方、周辺の地理、簡単な歴史など。

暦は現在大陸暦760年。

これは“アカの英雄”と“魔女”的出現の年らしい。

「何ソレ?」

「……フジムは見てなかつただろうけど、魔女はいたわよ。私たちを呪った人もあるし」

うん、覚えてない。

魔女という単語には聞き覚えがあるが。

「同じ年くらいに見える人の人つすよ。実際は760年以上生きてるらしいんですけど」

「は?」この世界ってそんな長生きなわけ?」

「いや魔女だけらしい。何でも“精霊の血”を浴びたせいだと。で、“アカの英雄”っていうのが魔女の師つす。この人はもういないみたいっすけど」

大陸で一番長命な魔女の出現から760年。
あれか、キリストみたいなものか。

しかし精霊。

またファンタジーというかメルヘンな単語が出て来たな。
「不老不死らしいよ。何かあつたら魔女に聞け、っていうのがこの国のやり方みたい。つまり私たちの召喚もそういうこと。迷惑な話よね」

逆に魔女さえ味方につければってことか。

帰れない以上、別に国と敵対しているわけでもないしその必要はないわけだが。

大変そうな立場だな、と漠然と思つた。

この世界に来て数日が経つた。

1日みっちり勉強でかなり疲れる。

運動不足解消のため、訓練場の出入りも解禁となつた。

アスレチックのようなものもあり、わりと楽しめる。

何より娯楽がないことがつらい。

元の世界ではバイト三昧でテレビもあまり見なかつたが、まったくないとなると逆に見たくなる。

そうなつてくると簡単に出来そうなボードゲームの作成に手が出る。主に真琴が欲しがり、滋郎が作るのだが。

滋郎は元々手先が器用で時計やペンを解体したりもしていた。いずれ開発系を体験したいつす……とにやにや亥いていた。意味がわからん。

もう少ししたら週に何日かは休みになり、自由に行動出来るらしい。それから語学の授業は大分減り、魔法の授業が始まる予定だ。滋郎がものすごく嬉しそうなのは分かり切っていたことだが、意外にも真琴が楽しみにしているようだ。

一度訓練の見学に行つたのだが、及川はすでに魔法を使える。エディは素質がある、天才だと讃めちぎつていた。いや楽しそうで何より。

自由行動が出来るようになつたら、城下町で食べ歩きしたい。この世界のケーキ屋とかもの凄く興味がある。

城下町だけでケーキ屋が5店舗以上、カフェも数軒あると聞いた。人口が数千人の町としては多い方なのではないだろうか。

元々ケーキ屋の家に生まれ幼少の頃から手伝つており、両親が亡くなり店を畳んでからは歳の離れた兄の店で働いていた。

兄の店は養鶏場である義姉の実家の卵を売りにしていた。

ケーキ屋ながらイートインも出来、そちらではランチセットもあつた。

バイトは主にケーキ製造だが、ランチのピークには料理も担当していた。

滋郎の担当はケーキ製造と接客である。

「先輩、俺も行きたいっす」

「そうだな。最初は皆で行つた方が良いかもな」

そうでもしないと春日は引き籠もりをつだし。
共通語の学習は春日が一番進んでいる。

さすが英語科。

しかし積極性がないので会話が出来ていても「ええ、出来てないよ」という気がする。

逆に一番進んでいない真琴が一番会話が出来ていてるのはないだらうか。

さすが積極性のカタマリ。

真琴は部屋付きのメイドに翻訳機を外してもううつてまで実地で勉強する徹底振り。

なのに何故か授業は身につかないといつといつが真琴らしい。

「食べ歩きもいいけど買い物したーいー！」

真琴の訴えに春日も頷く。

「服とか小物とか色々見たいです」

女の子だな。

「俺武器屋とか行つてみたいつす」

滋郎は堪能しそうだよな。

早速エーティに話したところ、ヒューティ引率で町見学に行くことになつた。

実地で語学学習といつわけだ。

城から出るのは初めてだ。

緩やかな坂道を下り、門を潜れば城下町。人が多く、朝から活気がある。

「朝市がありますので、この時間は賑やかなんです」

通りは野菜や果物、魚介類など食べ物が多い。板に大きく値段が書かれており、物価はわからないがどの店も人が溢れている。

パンや串焼きなどの軽食も並ぶ。

良い匂いだ。

城で朝食を食べずに出ているので腹が減っている。

「さてそれではコインをどうぞ」

コインを数枚渡される。

何かの実を刻印された、小振りな銀色。

「朝食はそれぞれ買って食べて下さい。最悪言葉が通じなかつたら、コインを渡して指差せば良いですから」

何て無茶振り。

鬼か。

この人混みの中放り出すか普通。

エディからだと魔力感知でそれぞれの所在地がわかるので問題ないらしいが……。

そういう問題か？

『マインを持つて軒先を覗く。

「ホツトドックっぽいな」

板に2と書かれてあるので、おそらくマイン2枚だろう。

『ひとつだわ』

『はいよ。 と びつちが良いっ』

「は?」

聞き取れなかつたのか、新しい単語か。
まあいいや。

『おまかせします』

わからなかつたらこれで良いじやん。

渡されたホツトドックに醤り付く。

千切りキャベツにトマト、ローストハムに塩胡椒。
ちょっと物足りないけど皿に。

シリアルより断然皿に。

果物が並ぶ軒先でそのまま食べられる果物を教えてもらつた。
明るい黄色で皮ごと食べられ、食感は洋梨のような感じがする。
皿の実といつりしこ。

朝食後合流し、女子リクエストの衣服や小物を取り扱う店へ。日本に比べるとシンプルで落ち着いた色の服が多い。服は支給されているので必要ないが、女子は違つらしく数点購入していた。

こりいう金は城から出でているらしい。

税金か？

真琴は出世払いだと言つてていたが。

滋郎のリクエストでもある武器屋にも寄る。城の武器庫にあるもので十分だ。

買う必要はない。

しかし値段の高さや武器の重さにはしゃぐ一同。呆れつつ見守るエテイ。

昼食は生パスタだった。

聞けば乾麺はあまり普及していないらしい。魔法の発達で早くから冷蔵庫もどきがあり、食品の保存に関して不便がなかつたからだろう。

同じ理由で保存食の種類が少ない。

クリームを和えた生パスタにサラダとスープ。デザートに皿盛りのケーキ3種。

「エリのケーキは城下町で一番人気のあるお店のものなんですよ」

店で出すケーキを違うケーキ屋から仕入れることはわざとよくあるが、こちらでもよくあるのだろうか。

「あとでそちらのお店にも行つてみましようか」

それはぜひとも。

ケーキ屋は見事に女性ばかりだった。

「居心地悪いっす」

同意。

滋郎の咳きにエディも頷く。

居心地が悪い男3人。

客は女性ばかりだがちらりと見える従業員は男が多い。
そこは日本と変わらないようだ。

父の店も兄の店も正社員は男ばかりでむさ苦しかった。
逆にパート・バイトは2人以外、女性ばかりである。

「フジム、色々買って皆で食べようよー」

「やうだな」

ころんとした形のクッキーに、アーモンドたっぷりの薄い焼き菓子。
花型の焼き菓子は味にバリエーションがあるのか、3色並ぶ。
フレークにココア、ベリー系だろうか。
定番の貝型は見当たらぬが、これが近そうだ。

わざとよく見るお菓子もあれば見たことのないお菓子もある。

生ケーキも同じで、見たことのあるケーキも、ないケーキもある。素材 자체が少し違うだろうし、当たり前といえば当たり前のんだが。

さすがにすぐに食べないといけない生物は少しだけにして、焼き菓子を中心に購入。

語学学習も兼ねて、素材や消費期限についてなど色々話を聞いてみる。

朝市でも見掛けたが、果物に関しては違つものが多いようだし、要研究だな。

「次はどうに行きましょうつか」

「本屋に行きたいです」

エディの問いに滋郎が即答。

本屋に決定した。

重い扉を押して店内に入ると、そこには本でいっぱいだった。つて当たり前か。

背の高い棚が立ち並び、中にせきつてしまつと本が詰められている。各分野の専門書から小説まで色々とあるようだ。

漫画や画集、写真集などは見当たらない。

「フジム先輩、お菓子の本があるつす」

「えーっと……菓子作りの、基礎……か?」

嬉々として滋郎が本を差し出して来る。

タイトルを読む。

しかしここでまだ文字に慣れていないので、時間が掛かる。
読みに関しては滋郎と春日が早い。

「つす。内容も結構おもしろいっすよ」

ページを捲つてみるがやはり写真や絵はついていない。
ちょっと欲しいが、本はわりと高価なようだ気が引ける。

「出世払いっすよ、先輩。ここでもケーキ屋で働くんじゃないす
か?」

忘れてた。

言われて気付く。

この世界で何か職に就かないといけないんだった。
この世界に永住するんだった。

「滋郎はどうすんだ?」

「俺は開発とかしたいんすけどねえ」

「開発?」

「はい。家電でも良いしエネルギーでも良いし……せつかくなので
色々してみたいっす」

まあ滋郎なら頭脳職だよな。

肉体労働という感じではないので、ケーキ屋にバイトで入った時は
吃驚したものだ。

高校でも進学科だし、元々中学時代から成績が優秀なことは知っていたので、塾通いか家庭教師をつけるかで学業に専念するものだと思っていた。

「経営も良いつすね。フジム先輩の店の経営担当」

「ああ、それは良いな。

製造は好きだが原価計算や費用や利益の算出は面倒なのだ。

「それなら私は接客ね」

真琴がひょいと棚の裏から顔を出した。

「春日ちゃん、めっちゃ真剣に本見てんの。さすがよね」

確かに真剣に本を読んでいる様子だ。

「もう小説読めるレベルって。私とフジム、やっぱくなー?」

「俺らが普通。こいつらが天才過ぎるんだよ」

普通に考えてみる。

一ヶ月も経たずに英語の小説原文で読めるやつなんていないだろ。辞書片手にならともかく。

「それもそうよね。うん、良いんだ！ 私は私のペースでいい！」

「おー」

「あー、フジムのとこのケーキも好きだけど、オムライスも美味しいよね！ オムライス食べたい！」

何で女子ついにいる話題が変わるのが。

兄の店は、店の名前がたまご工房でそのまま卵が売りだ。ランチメニューも自然と卵料理がメインとなる。

女性客にはオムライス、男性客には親子丼が人気だ。

「そうだよな。うちの料理もそりゃ皿いけど、食い慣れたもん食いたいってのはある」

醤油とか味噌とか米とか、特別好きってわけじゃないけど恋しくなる。

米とか大豆はあるみたいだし、似たような調味料もあるかもしれない。

エディに頼めば探してくれるだろうか。
頼んでみるか……。

さすがに買ったものすべてを一日で消費できるわけもなく、夕食を終え、腹ごなしこと散歩に出ることにした。

部屋から見える中庭に出てみた。

よく見えないが色々花が咲いていたような気がする。

月が一つ、夜空に輝く。

「今日は両方青いのか」

前と違い、月が二つとも青白く発光している。

何か法則があるのだろうか。

まだまだこの世界は知らないことばかりである。

『……誰だ』

木の陰が動く。

耳障りの良いアルトに振り向くと、ちょっときつやうな顔立ちの少女がいた。

薄暗いので色彩はわからない。

『キイト・フジムラ』

誰だと言われたので名乗る。

異世界から召喚されたといつ単語を聞き忘れていた。

説明が出来ない。

『ああ……の
か』

「は?」

聞き取れなかつた。

まだ習つてない単語だらうか。

『ああ、良い。私の名前はリゲル。……リゲル・ノーグ』

『リゲル』

復唱する。

『“魔女”と呼ばれている、貴方達を召喚した責任者だ』

息を飲む。

“魔女”という単語は滋郎達から聞いている。
まさか一対一で会つことになるとは思わなかつた。
何て偶然だらう。

突然リゲルは頭を下げる。

この世界の人間が頭を下げているところを初めて見た気がする。
風習の違いかと思っていたが。

『貴方達には申し訳ないことをしたと思つている』

眉を顰め苦しそうに吐き出す言葉。

意外だ。

もつと傲慢そうなイメージを持っていたのだが。

それこそ“この世界の役に立てるなんて嬉しいだらう？ふふん”的
な。

『恨んでくれて良い。私が責任を持つて必ず

』

また、聞き取れなかつた。

リゲルは俯き、表情は見えない。

『何か困つたことあれば言ひてくれ。……出来ることなら何でもする』

顔を上げる。

意思の強そうな瞳が射抜く。

「あ……と『わかつた、伝える』

『頼む』

ふとりゲルの口元が緩んだ。

700歳以上だとか言ってたけど、何かかわいいな。
まあ見た目は同じ年くらいにしか見えないけど。

『ありがとう、キイト』

……花が綻ぶよつて「ヒツジ」とか？

射抜かれたのは、何。

0 · 05 魔法……？

エティに頼んでみた調味料が届いた。

探している醤油や味噌の特徴を口頭で説明できるはずもなく。

“この世界に存在する調味料をすべて”取り寄せてくれたらしい。

すらりと並ぶ、調味料。

並ぶなんでものじゃないけど。

箱に詰め込まれてるけど。

「どんだけだよ」

「研究のし甲斐があるじゃないですか」

滋郎は何故か楽しそうだ。

そしてエティには料理人を目指すと思われているようだ。
あながち間違いでもないが。

まずはひとつ開封し、ぺろりと舐めてみる。
オイスター・ソースっぽい?
炒め物にしてみるか。

炒め物向きやうな根菜や葉菜を手に取り、下揃えする。

「フライパンがない」

そうか、調理器具も違うのか。

同じものも多いが、見たことのないものもある。
そういうえば箸も出て来たことないもんな。

道具も色々頼んでみるか。

出世払いだ、出世払い。

とりあえずフライパンは両手鍋でいいか。

鍋を熱し、油を敷く。

素材をいれ、炒める。

火が通ったところで調味料投入。

「よし、うん、普通」

「ごく普通の炒め物が出来上がり。
若干中華風といえば中華風。

この分だと道のりは遠そうだ。

箱詰めの調味料を見て、溜息を吐いた。

「それでは今日から魔法の練習をしましょっ」

「キター！」

「待つてましたあ！」

滋郎と真琴のテンションが高い。
うぜえ。

魔法の練習ということで、場所はいつもの部屋ではなく訓練場である。

「今回はもう一人、講師を頼んでいます」

エディに呼ばれ、入ってきたのは“魔女”リゲルだった。

あの夜わからなかつた髪の色は、銀。
光の加減によつては白っぽく見える。
濃い灰色のローブが“魔女”らしい。

「“魔女”……」

ぽつりと春日が呟く。

その表情は暗い。

「へー、“魔女”が講師？」

『リゲル・ノーグだ。リゲルと呼んでくれ』

真つ直ぐに真琴を見てリゲルが言う。

「ま、責めても仕方ないしね。『私は真琴。マコって呼んで！ よろしく、リゲル！』

肩を竦め、笑顔を見せる。

裏のない笑顔。

『富尾滋郎つす』

『春日です。よろしくお願ひします』

リゲルと田が合った。

真琴が不思議そうに見ている。
ああ、自己紹介しないからか。

『髪の毛、銀色』

『ああ。前にあつたときは暗かったからか』

『綺麗』

『は……』

リゲルが田を瞪る。

その様子を見ていた滋郎たちも驚きの表情で2人を見た。

『……キイトの髪も、綺麗だ。夜の色で』

リゲルがはにかむ。
やばい。
かわいい。

「うわあ……フジムが説し込んでる」

「珍しいっすね」

説し込んでるなんて失礼な。
正直に、本心しか言つていないので

「……あの、とつあえず魔法の授業、始めても良いでしょ」つか

エディが苦笑いでつぶやいた。

魔法の授業が始まった。

魔法には分類がある。

攻撃系魔法や防御系魔法、補助系魔法など、属性とはまた別の分類である。

まずは難易度の低いもの、簡単な攻撃と防御からとことじだ。

初歩の初歩の魔法は掌もしくは指先で、自分の属性の魔法を出現させるというもの。

「水にしましようか。ここにいる6人全員の共通属性ですか？」

エディが掌を上に向けた。
注視する。

「」

水の塊が出現する。

液体なのでそれが流れ落ちる様子を黙つて見ていた。

「……ちょっと待つて」

「何でじょっか」

「今の、何？」

真琴がふるふると震え、問う。

エディは質問の意図がわからず、首を傾げながら答える。

「水の基礎魔法ですが……？」

「そうじゃなくて！ 何今の、呪文なの！？」

「え？ 呪文？」

「そうですよ！ 何すか今の！ もっと！ ついでねー？」

ねつて。

「今のは水の出現を表す魔記号ですが」

「魔記号?」

「ええ。魔法に魔記号は欠かせません」

「……期待外れもいいとこだわ」

「うつ。つまんないつす」

「お前ら話進まねえだらうが」

「うす」

ゲームや漫画でよく見掛ける、長い呪文を唱えるものを想像し、期待していたらしい。

「気を取り直して……／＼

「…………」

真琴の顔がひどいことになっている。
お前女だろ。

「これが出現した魔法をその場に留める魔記号です」

水は流れ落ちず、ヒーティの掌にある。

「留められる時間は魔力の流し方や量によって変わります。個人によつても違つて色々試してみるしかありません」

水が消えた。

エディがまた新しく魔記号を呴く。

「 / ; 「

掌の水が放出される。

「あ、駄目っす。イラつとして来た」

「抑えろ滋郎」

滋郎は夢が壊れたせいか苛立つてゐる。
普段へらへらしていいるが意外と短気だ。

「今のは留めた魔法を飛ばす魔記号です。方向は魔力を流した方向
と逆に行きます」

「次は……リゲル」

『どうぞ』

「 / : 「

『 re : 』

「これが防御ですね。魔記号は順番を入れ替えたり省略することで
違う魔法になつたり、効果が変わらなかつたり色々ですが、最初は
まず基本的な魔記号を覚えることから始めましょうね」

面倒になってしまったんだが。

これは避けられないのだろうか。

子供でも魔法が使える世界だと黙っていたので避けられないんだろうなあ……。

エーティやリゲルに見てもう一つ、魔法の練習を始める。

「 / 「

意外と難易度は低いらしい。

子供も使えるので当たり前なのかもしれないが、しかし魔法のない世界から来た身としては感動モノである。

別に魔法にあこがれも何もなかつたが、これは中々。

基本は の部分を他の属性の魔記号に変えるだけだ。それぞれの属性の魔記号を教えてもらい、練習する。

全員難なく魔法の基本を習得した。

咄嗟に使えるかは別であるが。

練習風景を見て何を思ったのか、夕食後、滋郎が唐突に話を切り出した。

「フジム先輩リゲルさんが好きなんですか？」

何故。

「いや好きついでいうか……まあ、正直なところ見た目は好みだ」

嘘ではない。

きつめの顔立ちなのに笑うとかわいいなんてモロ好みだ。

「…………」

「ちよ、フジム、春日チヤンひいてるじやんー」

「何でだよ、正直に答えただけだる。大体中身が云々つつもま
ず見た目からじやん」

見た目が受け付けないと中身も見えないだろ。

「え、そんなことないでしょ」

「いやお前、いくら中身良くても小学生とかじいさんとか好きにな
ることないだろ?」

性別、年齢を含み見た目の一印象は大切だと思つ。
それにどんなに美人でも不潔だったらひくだらうし。

「そりゃあ、まあ、そうだけど……」

「つていうか“魔女”は老女じゃないんすか

確かに700歳は老女だろうが。

「見た目は若いから良いんじゃね。つか見た目は好みだけど好きと

は言つてないだろ

「えー……」

つうか何だこの会話
色々おかしいぞ。

語学と魔法とその他色々。

午前中いつぱいは座学、昼食後は魔法を詰め込む。

夕方からは自由時間になるので、滋郎や真琴と訓練場で体を動かすことが多い。

中でも魔法で作った水球を投げたり打つたりが最近のお気に入りだ。春日は体を動かすのが苦手なようでもつぱら見学である。

イメージ通りだ。

たまに一日中自由な日が出来、城下町に行くようになった。
引率はなしである。

大抵4人一緒に行き、女子が服や小物を見ている間、町を探索する。
服選びになんか付き合つてられるかつつの。

「先輩、今日はこの店どうつすか？」

「そうだな。つうかこの店で最後なんじやね？」

今のところ毎回違うケーキ屋に寄っている。

一番最初は一番人気のケーキ屋だったが、次からは寄りやすい順に
回つた。

城下町にあるケーキ屋は全部で6店舗と聞いている。
この店が6店舗だ。

意外が多い。

お菓子という風習があり、特別な日にケーキを食べる人も多いの
だとか。

木製の看板、色の剥げた扉。

埃こそないものの、薄暗い店内にケーキや焼き菓子が並ぶ。

といっても、今まで行つた店に比べ、格段に種類が少ないのだが。

何ていうか……期待出来そうにない。

いやいや見た目だけで判断はいかん。
食べるだけは食べよう。

食べるだけは。

生ケーキを4種類と焼き菓子を数点。
いつもより量は控えめである。

やる気のなさそうな猫背の青年に清算してもらい、店を出た。

「何か微妙っすね。やる気もなさげでしたし

「だな」

女子と合流し、城に戻る。

今日はこれから及川の訓練を見学するのである。

及川は春日を誘つた。

春日は真琴を誘つた。

真琴は滋郎を誘つた。

滋郎は貴人を誘つた。

何だこれ面倒くせえ。

しかも誘つたんじゃなくて巻き込んだの間違いだろ。

春日と真琴がレモン水を作り、それを差し入れに騎士団の訓練場に行く。

「及川先輩、強いっすねー」

金属のぶつかり合う音が響く。
気合の入った声、怒号、声援。

及川は副団長と思わしき人物と模擬戦を行つていた。
剣と魔法を駆使して戦つているのだが、互角に見える。
貴人はそれよりもその横で模擬戦をしている若い騎士の剣が気になつた。

剣の色が透明に見える。
透けているのだ。

「及川先輩の腕なのか補正なのか」

「は?」

「何でもないっす

「すごいね、ミッキーかっこいいじゃん! ね、春日チャン!」

真琴の目が爛々と輝く。

真琴の持つていき方がちょっと強引な気もするが。

「そうですね、及川先輩が人気なの、わかる気がします」

まあ春日が同意しただけ良いか。

でも春日の性格上、否定することはない気がする。

「誰がミシチーだ！」

いつの間にか及川が近くまで来ていた。
心なしか顔がにやけている。

「あ、及川先輩、お疲れ様です。これ、良かつたら……」

春日にレモン水を手渡され、嬉しそうだ。

わかりやすいデレデレ具合。

それをにやにやと面白そうに見学する滋郎と真琴。

元々及川が春日に好意を持つていることは、周知の事実。
バレバレだ。

初日から田線がずっと春日を追っている。

そして何かと春日を気遣う。

わからないはずがない。

しかし春日はまったく気付いてないようだ。

春日も及川も人気があるので似合いだと思つ。
貴人にとってはどうでも良いことだが。

「あー、血が騒ぐー。混ざりたいーー。」

真琴がふるふるとふるえ、叫ぶ。

「混ざれば?」

「うーーーー下手に立つてもあれかなあって」

確かに、下手に立つて救世主候補にされても困るだね。

「まあな」

「あ、じゃあ魔物討伐とかビーフですか？ こるんですね、魔物」

「あーそうこうえば言つてたな。町の外には出なによつこつこ

自由行動の範囲は城下町の中だけだと言われている。
町の外に出れば魔物の出る区域もあるからだそうだ。
そのため魔物討伐の職もあるといつ。

が、滋郎の期待したギルドは存在しないことド、ショックを
受けていた。

「魔物つて……スライムとか？ レベルとか上がんないのかなー」

「ゲームじゃあるまいし……呪文もあれだつたら、期待すんなよ

「そりだつた……期待なんてしない……」

「そもそも魔物つつつとも、生き物を殺すことだからな

その覚悟はあるのか。

真琴が落ち込む。

3人で話している間に、及川は訓練に戻つて行つた。

「やういえばさー、春日チャンつてどんな人が好きなの？」

ぱつと顔を上げ、にやにやと春日に話しかける真琴。

「え」

途端に春日の顔が赤くなる。
色が白いのでわかりやすい。

「えつと……あの……」

湯気出そう。

「わ、たし……は……その……」

春日は意を決したかのように顔を上げ、真剣な面持ちで語り始めた。

「男の人ってあんまりしゃべらない方が良いと思うんです。無口つていうか、落ち着いてる雰囲気で、クールな感じが格好良いなって。ちょっとぶつきらぼうだけど優しくて頼りになるし、力もあって。すごく真剣に働いてるのも格好良いんです。人気あるのに相手にしないところも媚びてないっていうか」

目を丸くして、春日を見つめる。
つうかそんなに喋れたんだな。

「それに目付きがあんまり良くないのに笑うとかわいいどこのとか、
大きい手とか、」

「ストップ。そろそろ戻ろうぜ」

止めないとどこまでいくのかわからん。
何だか目立つているようだし、そろそろ夕食である。

「そうっすね。夕食後に買って来たケーキ、食べましょ」

「まさかの！」

「つすねー。せっかく救世主立候補したのに及川先輩カワインソウつ
す」

ケーキの味がイマイチで、気分転換にと貴人は散歩に。

春日は奥の女子部屋で休んでいる。
部屋には滋郎と真琴の2人のみ。

春日の、それ、貴人のことだよね？的な語りを聞き、二人は突っ込
みたくて仕方がなかつた。

「えーでもフジムねー。まあ中学の時は結構モテてたけどさあ。まだ一ヶ月くらいなのに、意外に惚れっぽい？」

「あー、いや。たぶんもつと前からりますよ。春日さん、たまむ工房の常連っすから」

「えー？」

真琴は驚いてテープルに身を乗り出した。

「フジム先輩は覚えてないかもしれないっす。確かに前に転びそうになつた女の子をキャッチしたことがあって、それが春日さんだったと思つんすよね」

「へー……何それ少女漫画みたい。ていうかミッキー知らないよね。バレないようにならないとかわいそすぎな……！」

「そうですね。及川先輩には頑張つてもらわないと」

当事者丸無視の恋愛トークである。

いたところで止められない氣もするが。

「マコ先輩は？ ないんすか？」

「興味ない」

一刀両断である。

真琴は本気で興味がなく、交際歴どころか初恋？ 何それと鼻で笑うような状態だ。

「まあ俺も興味ないっすけどね」

「2次元だけで良いつて？」

「その通りっす。その2次元も見れなくなっちゃいましたけど

残念そうに溜息を吐く。

滋郎はどこまでも滋郎である。

魔物討伐の職は、討伐隊といつ。城に属する騎士団の中にある部署のひとつである。大きくわけて3つ。

王宮騎士隊・警備隊・討伐隊。

花形は王宮騎士で、及川はこの王宮騎士隊である。この隊も色々細分化されているらしいが、詳しいことは聞いてない。

そんなわけで、4人は討伐隊に臨時参加することになった。自衛のための訓練として少しきらい経験しておべきだといつ」とだ。

異世界から召喚されたことは、城の人間は大体知っている。すなわち、騎士も知つているということだ。及川が救世主として扱われているので、残りはオマケだという認識。当然、舐められる。わかつてた。

「先輩、」

「駄目だつつの」

苛々した様子の後輩に駄目だしつつ、滾るぜーとはしゃぐ真琴を抑えつつ。

こんなキャラじゃないのに、と貴人は溜息を吐いた。春日は俯いたまま、もくもくと歩いている。

討伐隊はいくつかの班にわけられている。

一番優秀だという班に、まとめて放り込まれた。

初めての魔物討伐の標的は3本の角の生えた、大ネズミっぽい魔物である。

この魔物、一匹ずつは強くないが集団行動をとるので面倒なのだと。いつ。

生き物を殺すこと。

その覚悟。

「ざとことにかく自分の身を守れないようでは、困る。

城下町から一歩も出ないというならそれもありだと。
だがそういうわけにもいかないだろ。

自分の身を自分で守るために、出来ることはしておかないと。
幸い全員それなりに魔法が使えるので、直接手にかけずにすむ。
上手くやれば死体も残さないように出来るだろ。

一応貸し出されている剣はあるが、訓練すらしていない。

前に見た透明な剣は私物らしいので借りることは出来なかった。

「この辺りでサウンマスが田撲されている。やつらは群れで動くので油断しないよ」「た

隊長の注意があり、それぞれ周囲の探索に出る。

個人で動くと危険なので班単位で動く。

今回は4人一緒に、この班だけ人数が多い。

魔物を目撃したらホイップルを鳴らし、討伐隊全体が集合するのである。

最も参加している班が、今回は多くない。

探索開始。

森というほど鬱蒼としてないが、足場は安定していないし、見通しも悪い。

張り切つている滋郎と真琴は班長達と共に前方を歩く。その少し後ろに貴人と春日。

そのまた後ろにベテランの騎士が一人。

「大丈夫か？」

さつきから春日は一言も話さない。

「……はい」

「別に戦わなくて良いんだぞ」

現実を見ておくことは大事だと思う。
だけど戦わないといけない、ということはない。

特に春日は戦わないで欲しい。

及川が何のために救世主になつたのかという話だ。

「でも」

「……で戦おうが戦つまいが、いざとなつたらどうにかなるつて

樂観的だが、春日は「」で戦つても向にもなりなこと無いのだ。

「井の」

「え？」

「及川もこるし、滋郎もマロもこる。春日は戦わなくて良い」

「わたしひとりだけそんな、」

「俺が良って言つてるんだから良いくんだよ」

田の前でひじかねるとひざご。

「」で戦つてその罪悪感とか嫌悪感とか負の感情でまた落ち込まれることも田に見えていて。

「お前は守りれてる」

春日の頭に手を置き、前を見据える。

「来たみたいだな」

春日もつられて前を見、息をのんだ。

笛がある。

集合、そして戦闘開始の合図だ。

「来たあ！ ジロ！」

「はいっす！」

走り出す二人。

楽しそうで何よりだ。

「 / : 「

真琴の放った水球が、勢い良く魔物にぶつかる。

魔力を多めに乗せればその分威力もスピードも上がる。

一番最初に覚えた基本中の基本だが、真琴が使えばかなりの威力だ。

「 / : 「

滋郎の放った風の刃が魔物を切り裂く。

魔物の体は真っ二つに裂け、血が吹き出る。

青い。

魔物の血液は青か紫が多いのだ。

「 / ; 「

繰り返し、繰り返し。

滋郎が風の刃を無数に操り、魔物を細切れにしていく。

その様子を見て、春日が涙目になる。

顔色も悪い。

何で当事者があいつらは全然平気そうなのに、何もしていない見ているだけの春日がこうなのか。

不思議だ。

二人が調子に乗つたおかげで、貴人を含め他の騎士たちは出番なし
だ。

「いやー、大丈夫だつたわ。余裕余裕」

魔物の強さと、生き物を殺すことに対しての両方か。

「そうっすね。魔法で攻撃つていうのと、モンスターの形状がかわ
いくないからつていうのもあるんすかね」

あつさりと言つてのける一人。

まあ吐かれたり鬱になられるより全然良い。

「お、お強い、ですね……初めての戦闘だとお聞きしておりました
が」

班長が頬を引き攣らせながら言つ。

「魔物討伐は初めてつすけど、まあ、慣れてますから」

滋郎はおそらくゲームや漫画で耐性があると言いたかったのだろう。
しかし班長はそういう意味で取つていない。
取れるはずもない。

「意外と魔力使わなかつたね。つていうか火の魔法使いたかつた!」

真琴は火の魔法が一番相性が良いようだ。

しかし森で火を放つわけにもいかないと、今回は禁止されている。

「でもこの程度じゃあ救世主になんてなれないから、ここにいるんすけどねー」

厭味だ。

お前たちより遙かに多いこの魔力を持つてしても、救世主ではないのだと。

につこりと爽やかそうな笑顔で言い放つ。

滋郎は根に持つタイプである。

「あ、先輩は良かつたんすか？」

「別に良い」

魔物討伐は何回か参加予定になつていて、進んで戦いたいとは思わない。

見ている分には気分が悪いこともなかつたが、自分の手に掛けるとまた違うのだろうか。

「それよつも終わつたなら早く帰りづ。春日がヤバイ

口元を手で押さえ、蹲る春日。

「わ！ 春日チャン大丈夫！？ ジロ、おぶれ！」

「え、俺つか！？」

「当たり前だる、わしだらー。」

滋郎は渋々嫌がる春日をおぶり、歩き出した。

その様子を奇異の目で見る騎士たち。

貴人はこつそりと溜息を吐いた。

魔物討伐が終わり、翌日は休日。

エディが気を遣つてくれたのだが、貴人は何もしていない。

春日は体調不良でベッドの中で、真琴は一層火がついたらしく、とうとう騎士団の訓練に混じつている。及川と同じところだ。

そんなわけで男一人、ぶらり城下町。

「あ、この店閉めたんだな」

前に寄つた薄暗い店だ。
扉には休業のお知らせが貼つてある。

「まあ無理もないっす」

他の5店舗に比べ、格段に人気がなかつたのは見ればすぐにわかつたことだ。

「どういつ意味ですかああああああ

突然の大声に驚き振り返るとそこには、号泣する猫背の店員がいた。

「こんなに、こんなに頑張つてるのにいいい」

じろじろと町行く人に訝しげに見られ、2人は慌てて店内に逃げ込んだ。

青年を引き摺つて。

「いや、すみません、取り乱しちゃって……あ、僕はイグレッシィオと言います。どうぞグレッシとお呼び下さい」

ようやく落ち着いたらしい。

差し出されたお茶を啜り、息を吐く。

「じつは僕、外国で絵の勉強をしてたんです。でも父親が亡くなつて、店をどうするかって話になつてそれで」

画家の卵なんて儲からず、副業でどうにか食べていた日々。

突然の訃報。

父の店を閉めてしまつのも嫌だという兄弟との話し合つによつ、一番条件の合つイグレッシィオが店を引き継ぐことになつた。遺されたレシピを見て店を開け、副業としてケーキ屋を営みつつ、絵の勉強をすれば良いと。

しかし、この有様である。

人に押し付けた癖に兄弟たちには詰られるしで最悪だ。

「うへ……」

再びぼたぼたと涙を流す青年に、貴人は慰めの言葉をかける。

「今までケーキ屋で働いてたわけじゃなかつたんだろ？ 頑張つたな」

「結果は努力だけでどうにかなるもんじゃないし、しょうがないですよ。売れないもんは売れないっす」

「うへ……！」

「バツカ滋郎、落とすんじやねえよ、上げろよ」

「あーせん」

滋郎に口無じこされた。

うざい。

「それでこれからどうあるんすか？」

茶請けに出されたクッキーを食べ、お茶を啜る。
うん、硬すぎる。

「それなんですね……うひよひ……」

落ち込むイグレッシュイオに、滋郎が優しく声を掛ける。

「それなんですかね、職人を雇えれば良いと思つんすよ」

「おい、まさか」

「やうつす。俺たちを雇いません?」

「え?」

滋郎の言葉にイグレッティオは目を丸くした。

「じつは職人なんすよ。雇つてもうえればこの店、立て直しますよ?」

「ほ、本当に……?」

「本当つす。任せて下さー」

滋郎のその自信は、一体どこから來てるのか。
人に押し付ける気満々なんじゃないだろつかと思つのだ。

結局こうなるんだよな。

貴人は溜息を吐いた。

面白そうではあるが、どうなつても責任は取れないぞ。

「それで、この店のウリは?」

「はい?」

「セールスポイントとかコンセプトとか」

「そんなものあつません。父親の残したこのレシピを見て作つてゐるだけですから」

イグレッシュ・イオは自慢げにレシピを掲げながら言つたが、それは自慢して良じところではない。

「……それでよく頑張つてるとか言えたつすね」

店内に滋郎の呆れた声が響く。

氣を取り直して。

「あー……前の店と大分変わつても大丈夫か?」

「ええ、それはもちろん! 店があるつてだけで兄弟たちは満足なんですよ」

「それなら良いくだ

この世界に来てまだ日も浅く、前の店舗の情報も少ないとなると、おそらく全然違う店になる。

立て直せればそれだけで良いつていうのなら、なんとかなるかもしない。

まず敵を知りう。

イグレッシィオに他店のお勧めを色々買って来て貰つた。

胸焼け胃凭れと戦いつつ、他店の傾向を探る。

「これが一番人気の店のだな。全体的に小さめで作りが丁寧。値段も高め、高級感がある」

「で、こっちが一番近い店つすね。素朴な味わい、若干大きめ、安い」

「この店はマフィンの専門店です。種類がたくさんあって人氣です」「この店はフルーツをウリにしてるんすかね。フルーツの使用量が多いっす」

「つうかこっちのケーキは全体的に甘めだよな……この店は作りは丁寧だけど手頃な値段設定。立地が良ければもっと人氣でそう」

ミント系のすつきりしたお茶を飲む。

「そこまで特徴のある店はないか。こっちの世界はあんまりコンセプトとかないのかもな」

「そつすね。逆にやりやすいかもしないっす」

被る心配がないという意味ではやりやすい。

「まずは品揃えからな」

どの店にも置いてある商品を滋郎に書き出してもらひう。

城下町で定番中の定番といつゝことだらうし、この店でも外せない。

「やついえばこれ」

花型の焼き菓子の赤色のものを摘む。

「何味？」

味はベリー系なのだが、形は残つていなし、何よりこの世界の素材に詳しくない。

「ああ、アカの実ですよ。この町ではアカの実の人気が高いので」

イグレッツィオが指差したのは、ケーキの上に乗つた飾りだった。
赤すぐりによく似た赤い果実。

一回り大きく、酸味が若干少なく、甘みが強い。

「どのくらい人気なんすか？」

「そうですね……年中取れて値段もお手頃で、お菓子の定番といつか欠かせないものですね」

日本でいうと苺のような扱いか。
味も良いし色味も良いから使い易いな。

「商品の種類の最終決定は試作してからだな。まずは設備に慣れた
いし、明日から厨房借りるぞ」

「どうぞどうぞ」

「オヤジさんの遺したレシピも貸してくれるか？」滋郎^{シロ}しておこう
てくれ」

日本語で。

「はこつす」

「う、あとは店なんだナビ」

店内を見回す。

穴が開いていたつとこつ」とはないが、壁の色が剥げているのが気
になる。
ところどころ染みもあるし。

「改装とこつよつ塗装しようぜ」

「良こんですナビ、資金が……」

「資金つけての？」

「向つて塗装代ですよ」

色遣いが地味な世界なので、ペンキも高いかもしない。

「あー、ペンキ代はハイに値づくわ」

魔法の呪文、金利なし、出世払い。

自分達の職のためといえば済むことはないと思つ。

「ペンキ代ではなく塗装代ですよ。塗装だけでも結構な額が掛かる

んです「

「……ペンキは調達するんでグレッシさんが塗るつていつすよっ」

囁み合つてない会話に滋郎が注釈を入れる。

「え？」

「絵描きなんだろ？ 壁をキャンバスだと想つて塗れば良いんだよ」

「わー先輩無茶振り。でもよろしくつす

むらがあつても手作りっぽくて良いんじやないだろつか。
いつそそういう風にしてしまうのも良いかもしない。

ただ手作り風が日本で受けっていたのは、それが一般的ではないからだ。

この世界ではむしろ手作りが一般的である。
受けるかどうかはわからない。

「あ、そうだ。グレッシ、アンタの描いた絵を見てみたい」

この世界初の絵描きの絵だ。

書籍には一切絵がなかつたし、城に肖像画の類もなかつた。
スケッチブックを見せてもらひ。

「いいね」

風景画や人物画が描かれている。
色遣いは意外と大胆だ。
良かつた、抽象画じゃなくて。

「お、この花、アカの実の花？」

その風景画にはアカの実になりつつある、大輪の花が描かれていた。

「はい、そうですが」

「この花をさ」

新しい紙に、アカの花を描く。

細部を描くのではなく、デフォルメされたイラスト調のもの。縁は太めでオレンジ掛かった茶色、中は少し渋めの赤。中心は暗めの黄色である。

「これを真似て描いてみて」

さすが画家の卵。

貴人も下手ではないのだが、断然上手い。

「これ口^ノにしようぜ。」こういつイメージで外壁と店内の壁に絵を描いて

「壁に絵、ですか？」

「そう、直接な。どの店も普通の壁だったからインパクトあるだろ。外壁はアカの花が良いけど、店内は風景画が良いか」

店内には商品の色もあるので、少し落ち着いた絵が良いか。

「壁は任せゆからな。ちゃんとボロいと隠せよ。そのための絵で

「さあ、なんだか

むしろそのための絵である。

1 - 04 試作

夕方になつてから店に籠り、試作を始めた。
菓子作りの基本の本と、イグレツツィオの父親のメモを参考にして
いる。

滋郎は原価の計算と売価の設定、店の飾りなど細かい部分を見直し
を頼んでいるが、商品が決まらないことには動けない。

グレツツには勿論壁に絵を描いてもらつ。

看板や焼き菓子を置くテーブル、ベンチにもアカの花。

包装材はどの店も同じものを使っていた。

印刷技術が発達していないので、オリジナルの包装紙はひとつしても
高くつくからだ。

高いなら作れば良い。

ということで、スタンプを作成。

アカの花と店名だ。

包装紙に押すだけなのだが、中々良い感じである。

包装紙が薄茶色なのでインクの色は赤みのあるオレンジにした。

この世界では包装紙で包み、茶色の紐で閉じ、花を飾るというのが
一般的なようだ。

リボンというか布製品が高め。

さすがにもう少し安くないと導入できそうにない。

仕方がないので紐はそのまま、ただし包装の仕方に変化をつけるこ

とで妥協。

こちらの世界のオーブンは、見た感じ石釜だ。
少しクセがあるものの、温度調整も出来るし性能はオーブンと変わらない。

ただ燃料が魔動石なので、うつかり燃料補充を忘れるといつもオーブンが止まる。

「よし、試作第一号の完成つと」

第一号はプチシューである。
どの店にもショーケースが置いてあったので、それをアレンジしようと思つたのだ。
カスターと生クリームを合わせ、アカの実を入れてアクセント。
仕上げに粉砂糖を篩う。

プチにしたことも意味がある。

第一に食べやすさ。

第一に残つたときの処理、である。

「第一号も完成。マロ、試食よひじく」

「任せて…」

出来るだけ色々と意見を聞きたいので、真琴を誘つてみたのだ。

「おこしーー！」の赤いの、クリームに合ひつけーー！」

「アカの実だつてさ。そのまんますぎる」

「確かに！　私この実好きだわ。ベリー系良いねー」

ベリー系が好きな女子つて多いよな。
逆に男子は好きな人が少ない気がする。

偏見か？

「で、第一号な」

「うん、こっちも美味しい。軽いしサクサクいける。たまご工房にもあつたよね」

「そ、あれのサイズ違い。ラスクは小さい方が食べやすいしな」

第一号はシューの皮を使ったラスクだ。
売れ残ったシューの皮をうまく処理するための商品でもある。

「ラスクがある店はなかつたし卖れないかもしけなけど、とりあえず捨てるよりはマシだろ」

試食を出せば売れる可能性もあるし、何事もやつてみないとわからない。

真琴の反応は良いし、グレットにも試食してもらつてから商品に加えるかどうかを決める。

美味しいか、美味しくないか。

売れるか、売れないか。

作業効率が良いか、悪いか。

色々考えて商品を決めていく。

本日の試作はこれで終了。
日中に授業がある日はそんなに長く時間を取れない。
試作品の残りを持って城に戻る。

「あ、リゲル」

「マコ、キイト。出掛けたのか」

「俺と滋郎が城下町のケーキ屋で働くことになつそうなんだ。で、
試作に付き合つてもらつてた」

「ケーキ屋？ 意外だな」

「フジムは元々家がケーキ屋さんなんだ」

イメージに合わない、とはよく言われる言葉だ。

「あ、そうだ。これ、試食してくれるか？」

貴人はリゲルにプチシューを渡す。

リゲルはこの世界の女性なので、試食にぴったりの人物だ。

「アカの実か。私も好きなんだ」

プチシューを口に運ぶ。

「美味しい。こんなに美味しいショーケースは初めて食べたな」

「大袈裟。でも、ありがと」

あまりお世辞を言いそうなタイプと思わなかつたので、少し驚いた。
素直に嬉しくもある。

「クリーム、ついでる」

リゲルの唇の端を、親指で拭う。

「うわあ……」

真琴が微妙な表情で呻く。

「何?」

「何でもない」

苦笑いだ。

リゲルも不思議そうにしていて、真琴は私がおかしいの?...どうひかる。

「そりいえば、何で“魔女”なんだ?」

ふと不思議に思つたことを聞いてみる。

前に少し聞いた氣もあるが、この際色々聞いてみよう。

「“魔女”は単なる通り名だが……そうだな。その昔精靈の血を浴
びた事で不老不死になつた。それだけだ」

「不老不死……700年も？」

「こままの姿で700年以上生きている。皆先に逝き、私だけが永遠に取り残される。……だが、後悔はしていない。大切な人を守れたことが、むしろ誇らしい」

穏やかな微笑み。
やさしい表情。

「大切な人？」

何となく引っかかる。
もやつとするというか。

「師だ」

師。

そういえば前に聞いた気もあるな。

しかし精霊の血を浴びると“魔女”なんだとすると、他にも“魔女”がいてもおかしくないのではないだろうか。

「精霊の血を浴びて不老不死になるなら、リゲルの他にもいるんじゃないのか？」

「いない。精霊は元々、人の手で傷つけられる存在ではないのだ」

「じゃアリゲルは何で……？」

「精靈によつて作られた武器でない、精靈を傷つけることが出来る」

「精靈つて武器なんて作るの？」

確かに。

貴人の中で精靈は自然と一体化して暮らしていくよつな、そんなイメージだ。

妖精でも妖怪でも言葉は何でも良いが、人前に出てこないといつか。

「……かなり特殊なことなのだが、この世界に精靈の作った武器が5つある」

「へえーーー！」

ますますゲームみたいだ。

勇者がその武器を集めてラスボスを倒す、なんてよくある設定。

「今は封印されているが……そつだな、いざれ向かわなければならぬ。時が来れば」

リゲルと別れ、部屋に戻った。

春日はまだ寝ているよつなので邪魔にならないよつ一番手前の部屋だ。

滋郎は解体に行つて来ます、と日本語でメモがあつた。待て、何を解体する気だ。

「何かさ。武器が5つって出来すぎでない？」

「俺も思った」

「私達、本当は巻き込まれて5人なんじゃなくて、わざと5人呼ばれたんじゃないかって思える」

それには同意だ。

「何があるんだろうけどな」

現時点ではそれが何なのかはわからない。だがどう考えてもその5つの武器が怪しい。怪しそう。

「ま、いつか。その時になればわかるでしょう」

軽い。
軽すぎる。

ただ今それを考へても答えは出ないのは確かで、それなら他に時間を割いた方が良い。

「それよりも今は店の再建よねー」

店の再建が第一である。
その通りだ。

「わたし、これからどうすれば良いんでしょ」

春日は頭を伏せ、力なく咳く。

貴人はりあえず茶を淹れた。

試作のシユーラスクも添える。

魔物討伐で一人だけ気分が悪くなってしまったことを気にしているらしい。

大丈夫だ、たぶんそれが普通。

普通じやない2人と比べてはいけない。

「及川先輩やマ」「先輩みたいに戦えないんです」

「戦わなくて良いって」

「藤村先輩や宮尾くんみたいに、働くお店もない」

高校1年生の5月だし、アルバイトもしたことがない春日にいきなり働き口を探せというのは難しいだろう。

本来ならば高校3年間と大学の4年間という期間があつたはずなのだ。

しかも春日は英語科。

この世界で活かせるというわけでもない。

その上いきなりの異世界召喚で、将来のビジョンなんてそうそう浮かぶはずもない。

一番普通の反応をしてくるはずの春田だが、周りがおかしそうで思
い悩んでいるようだ。

「貴族に引き取られるまでもまだ時間はあるんだし、急ぐことないだ
ら」

そもそもビーの家に引き取られるかといつことも決まっていないの
だ。

「引き取られた貴族の家業を手伝うことになるんじゃないかな?」

引き取る方も、視界に入る場所にいたほうが助かるだろう。

「それが嫌なら……他の職に就くか」

城下町に住むことになるのなら、騎士団に所属か飲食店や販売店。
町の一角にある工場地帯で働くのも良いだろう。
この工場地帯は魔動石そのものや魔動石式の道具、紙、木工品など
が作られている。

原料となるものはHTラン国内の地方の村などから運ばれてくる。
市場や中卸というものは特になく、それぞれ商人が個人で切り盛り
していたり、生産者が直に店に売り込んだりする。
地方でも良いのなら原料の生産という手もあるが。

貴人の中で春日のイメージは衣服系の販売店だ。

布は遠方の村や町から運ばれてきて、それぞれの店舗で衣服などに
加工される。

よつてそれぞの店は単なる販売店ではなく、製造も行う。
全体レベルで見ると効率は悪いし、費用は掛かるし、価格の変動が
激しいと良いことがない。

しかし店によってかなり特徴が出るので、それはそれで面白い。

「春日は何がしたい?」

「何がしたいって言われてても……」

「じゃあ何がしたくない?」

「たたかいたく、ないです」

まあそうだよな。

一番良いのはケーキ屋に引き込むことなんだろうが、自分の店でもないし、そもそも現段階で人が増えてもどうしようもない。

「とりあえず引き取り先が決まるまで、色々見て回つてしてみたいことを探そう。ないなら自分で条件言つてHanterに探してもいいつけてのも手だし」

『氣落ちした春日の頭を撫でる。

「大丈夫だつて」

考えすぎだ。

真琴と足して2でわればちょうどいい感じである。

春日と別れた後、貴人は調味料試作の昼食を持つて、滋郎とエディに合流した。

昼食を食べながら滋郎の開発成果を見る。

「先輩！ 遅いっすよ！」

「悪い」

本日の昼食は魚介系焼き飯だ。

透明の魚介系調味料の試作である。

こちらの料理は煮込みとグリルが主流なので、あえて炒め物を多く作ることにしている。

フライパンはなかつたが、パスタ鍋という似た様な鍋を発見したのでそれを購入したのだ。

出世払いだ。

本来の用途は炒めるのではなく、軽く火を通し絡めるものらしい。やはり鉄製の鍋が欲しい。

フライパン、中華なべ、強い火力。

炒め物には必須だ。

「じゃーん！ ジッちの試作一号も出来たっすよ

「万年筆？」

エディが使っていたペンと同じ型だ。

「ジの世界のペンはインク内蔵型の使い捨てか補充型なんで、日本と一緒になんすけど」

滋郎は誇らしげにペンを掲げる。
テンション高いな。

「じつはこれ、初の魔術式なんです！」

「噛み砕いて話せ」

何だその魔術式って。

この世界の道具は基本的に魔動石を使用する。
もちろん手動式もあるが。

滋郎の言つ魔術式とつのは、魔動石を使用しないものの総称らしい。

まず、魔法といつのは魔記号を使つ5属性の攻撃・防御・補助。
魔術といつのは魔法とは別もので、使う魔力は同じだが質が違う。
大雑把に言えば5属性に当てはまらないものが魔術である。
魔記号を刻み、魔法を発動させる道具の類は厳密にいつと魔術にな
るらしい。

つまりこのペンはそういうことだ。

「使用者の魔力を使ってインクが出るんすよ。つまり半永久的に使
えるペン！ 補充いらす！」

使用魔力も微々たるものらしいので、この世界なら赤ん坊でも使え

る。

「たかがペン、されどペン。初めてこじては中々だと思つりますよ」

開発開発言つてたからな。

嬉しそうだ。

「これなら今までのペンもそのまま使えるし」

なるほど。

日本から持つて来たペンも魔術式にしてしまえば、インク切れにならないわけか。

とは言つてもキートは筆記用具の類を持つていないのでが。

「あー早く大物作りたいっす」

「あ。もしかしてあの透明の剣もそういうことか?」

騎士団の訓練を見学したときにみた、あの透明の剣。

「ええ、そうです。あれは氷の魔法を組み込んだものですね」

やろうと思えば、魔法で氷の剣を出現させることは出来る。
しかしそれだと戦いにくいので、ああいう魔術式の剣を使うのだからうだ。

媒体となる剣に氷の魔記号、刃の魔記号、維持の魔記号などを刻む。

あとは使用の際に魔力を流すだけで良い。

慣れれば魔力を流しつつ、他の魔法を使えるので便利である。

「 セウカ…… 良こよな、あれ

炎の剣とかちよつと憧れる。

「 待つてて下さい、先輩！ 僕が作るつす！」

それいつになるんだよ。

「 滋郎君ならばすぐに作れるんじやないでしょつか」

「 技術革命王に、俺はなる……！」

「 うわ！」

異様にテンションの高い滋郎を抑えつつ、店に向かった。

店に着くとイグレツツイオが店内の壁に絵を描いていた。

海と夕日の見える風景。

「すごいっすね、さすがプロ。俺、萌絵しか描けないっす」

「それもすうごと思ひたゞな」

集中しているようなので挨拶は後回しにして、試作を始める。

「今日せどりあるんすか？」

「どうあえずシート焼くか」

シートというのはたまご工房で使用していた天板型のスポンジだ。ロールケーキの生地なのだが、丸型で抜いて重ねればテコレーションケーキにも出来る。

「んじゃ詰量しますね」

「頼むわ」

計量を滋郎に任せ、貴人は買出しに出た。目的は果物である。

「こちらの果物の旬はよくわからないが、アカの実・ヨシの実・ブルーベリー・モモなどが並んでいる。

元の世界にあったものもあれば、見たことのないものもある。見た目が同じでも味が同じとは限らない。

試食のためにも一通り買ってみよう。

ついでに近くのケーキ屋にも寄つてみた。

10種類以上の生ケーキとたくさん焼き菓子。

この店に限らず、生ケーキよりも焼き菓子の種類が多い。籠の中に焼き菓子を入れたギフト品もあり、焼き菓子に力をいれていることがわかる。

「ギフトか……」

売れるのであれば何か考えないとな。

元の世界にもあつた乾燥剤や脱酸素剤の役割を持つものもあり、賞味期限はさほど変わらないだろ？

「その前に焼き菓子か」

マドレーヌが花の型になつているくらいで、他はそんなに変わらないように見える。

エトランはあまり他国の文化が入つてきていないので全体的な種類はそんなに多くない。

定番の商品は早めに試作してみよう。

店の改装が終わつたら早めに営業を再開したい。

シートを冷ましている間に、果物を試食してみることにした。ブルーベリー やモモは見た目通りの味だった。

拳大くらいの緑の実はスイカ味、ただし食感がメロン。

そしてこちらのバナナは中身は一緒なのだが皮は茶色だった。

「……うん、まあ味覚が同じで良かつたすよね」

確かに。

味覚が違つたら食べ物の確保が厳しくなつていたかもしれない。

冷めたシートにクリームを塗り、巻く。

ロールケーキである。

これの上にクリームを絞り、フルーツを飾りテコレーションしたロールケーキも作つた。

クリームにアカの実を混ぜ込んでみたり、チョコクリームにしてみたり、バリエーションも様々。

カットしたものとロールのままのもの、両方を売り出す。

「普通の白と、アカの実が美味しいです」

「俺はチョコがいいです」

これは単純に好みの問題だと思うので、出来るだけ種類を並べたい。あとは売れ行き次第で絞つていけば良いし、期間限定品にしても良い。

基本は一緒なので試作はしないが、丸型の「コレーションケーキも並べよう。

このシートはタルトや他のケーキにも使うので多めに焼かないといけない。

冷凍保存が出来るので、焼けるとそのまままとめて焼いておいたり。
残りを冷凍庫に入れる。

「え？」

貴人が振り返ると、イグレッティオが目を丸くしていた。

「何だ？」

「そこ、冷凍庫ですよ？」

冷凍庫を指差して、首を傾げている。

「うん」

当たり前だ。

冷凍保存するのに冷凍庫にいれずにどうするところなのだ。

「え？」

「え？」

「……この生地、冷凍保存出来るんっすよ」

見兼ねた滋郎が助け舟を出す。

「ええっ！？」

何その驚き様。

「冷凍技術はあるのに冷凍保存はしないのか？」

不思議だ。

もしかしたら「こいつが知らないだけで他の店ではしてるんじゃないだろうか。

「え、だつて、でもそんなことメモには……」

確かにメモには作り方しか書いてなかつた。

菓子の基礎の本にも冷凍保存のことは載つていない。

「まさかと思うけど……ケーキ、毎日一から作つてたのか？」

「え、はい」

「…………す」「こいつですね」

「ありえん。だからこの店だけ種類が少なかつたんじやね？」

「たぶんそうですね」

「え？　え？」

よくわかつていないので、イグレツツィオは滋郎と貴人を交互に見ておたおたしている。

「まあいいや。この生地は焼いたあと、冷凍保存出来る。他にも冷凍出来るもんは教えるから」

一人で毎日、よく頑張った。

すゞ、すじよつん。

「とつあえず今日は帰るわ。また来る」

お土産兼試食にケーキを持って帰る。シュー、ケーキと来たら次はタルトかパイか……。そういえばメモにも本にもパイがなかつたなと思いながら、2人は帰路についた。

「帰りたい……帰りたいよう……」

膝を抱え、蹲る。

この世界で暮らしていける気がしない。

春日はひとり、泣いていた。

今春日いるのは地下の一室。

室内なのに泉があり木も生えているという不思議なところだ。人も来ないので春日のお気に入りになっている。

「うへへ……」

泣き言を言つてもどうにもならない」とくらいわかっている。そつは思つていても、涙が勝手に出てくるのだ。

この世界に馴染めない。

戦うとも出来ないし、かといって働くことも出来ない。異世界の人の中に入つていいくことが、怖い。

どうして皆、入つていけるんだろう。
自分がおかしいのだろうか。

勉強は好きだけど、趣味という趣味はなく、特技もない。テレビや映画、雑誌は好きだし、買い物も好き。
だけどそれが仕事に繋がるかといえばそりじやない。

魔法だつて先輩達は3つ以上属性がある。
それなのに春田2つ。

それも水と風で、光といつ貴重な属性でもない。

どうしたら良いのだらう。

春日は溜息を吐いた。

冷たい水に手首を浸す。

気持ちいい。

ちやぱちやぱと遊んでいるしきにて水底の文字に気が付いた。

「ん……？」

詩だろうか。

興味本位で読み上げてみる。

覚えたての言語が楽しくて、つい色々読んでしまうのだ。

「えつと……」

『チカラが欲しければ 我を呼べ 我が名は
なり』

「名前、ないのかな」

名前の部分が読み取れないようになつていて、
文字が消されているといつも、削り取られているのだろうか。

「名前かあ」

家で飼っている子犬を思い出す。
白いロングコートチワワだ。

「藤花、元気かな」

きやんきやんとかわいらしい子犬。

春日がソファに座ると、膝の上に来たがるのだ。

まだ小さいので自力で登ることは出来ず、抱きかかえるのことが常だつた。

また目が潤む。

帰りたい。

家族も心配しているだろう。

帰れないと説明されたが、どうにかならないだろうか。

富尾君なら出来そうな気がする。
なんとなくだけど、富尾君だし。

『帰るために、チカラが欲しい。チカラを下さい。……白く氣高き
わん』

何がなく、呴いてみただけだつた。

その一言で、何かが起きるとも思わずには。

驚愕で見開かれた目、そして叫び声。

その声を聞きつけて騎士が、及川が、走る。

そしてその場に駆けつけて来た時見えた光景は

。

人を丸呑み出来そうなほど大きい白い蛇と

。

「フジム！
ジロ！」

部屋に戻ると真琴が慌てた様子で一人の腕を引いた。

「来て！」

一番奥の女子部屋に連れ込まれ、一人はその光景に目を瞠った。

「心」

笑いを堪えて滋郎を叩く貴人と、我慢出来ずに噴出す滋郎。

「え、何それ。笑うとこ? 他に反応ないの?」

2人の目に映るもの、それは。

小さな白蛇と楽しそうに戯れる春日と、蛇にびくびくしながらも一緒に戯れようとしている及川。

「いやーあいつよっぽど春日好きなんだな」

健氣だよなあ。

貴人は2人に聞こえないように小さく呟く。

「え、そこー？ ちうじやなくて、春日チャンが白蛇巻いてる」と
に反応しない？

「あ、そこか」

「ペツトツですか？」

「……もつこい」

真琴が拗ねた。

「あ、おかえりなさい！」

こちらに気付いた春日が、満開の笑顔で出迎えてくれた。
こんなに明るい春日を見るのは初めてのことである。

「それ、どうしたんだ？」

「地下の泉でもらったんだ」

そういうえばあつたな。

室内に泉があるなんてす「いなと思つた覚えがある。

「もひつたつて誰につすか？」

「えーっと……大きい白蛇なんですねけど……精靈らしきです。泉の
精靈」

「精靈つて白蛇なんだ。イメージと違つな

「IJの世界は俺に厳しいっす。IJといぐとく夢を破壊……」

そんなに落ち込まなくともいいと思つのだが。

「精靈すべてが蛇つてわけじゃ……。それで泉の精靈にこの子と、
精靈の巫女の力つていうのをもらひこました」

「へー」

精靈の巫女の力。

よくわからんが、もらつて困るものではないだひつ。

「精靈の巫女つすか。やっぱ回復系？」

「そうみたい。ハイディさんが回復系魔術の才能が開花したはずだつ
て」

「おもしろひうすねー」

滋郎は好奇心満載の顔でメモを取り出す。

いつも持つてるけど、そのメモは一体いつになつたらこっぽいにな
るのだらうか。

「あ、そうだ。フジムもジロも、明日から回復系魔術ってのやることになったか?」

「俺らもつか?」

「そ。春日チャンひとつじゅ寂しいでしょ。少しでも使えた方が便利だし、一緒にやってみようつてことになつたの」

「すみません……」

落ち込む春日ひづるたえる及川が面白い。
こつそり笑う。

「あ、そーだ! マコ先輩、これこれ!」

「何?」

滋郎が自作のペンを取り出した。

午前中に魔改造していたペンである。

「使用者の魔力を微量ずつ使うタイプで、インクいらずなんすよ。
今日改造したんす」

「へえー! おもしろい! 私のもやって!」

真琴は自前の筆箱を漁り、ペンを数本取り出した。

学校で配られた入学記念の万年筆に、女子の支持率が高いカラフルなペンが数本。

いつ見ても何に使うかわからない色のバリエーションだ。

自分の赤と黒しか入つてない筆箱を思い出し、苦笑いする。

「フジムは？」

「俺は筆箱持つて来てない」

皆渡り廊下で召喚されたのだが、そのときの持ち物は様々。貴人は手ぶらで、ポケット中に携帯と財布が入つていただけだ。他の4人は何かしら荷物がある。

「あ、これも忘れてた。試作のロールケーキなんだけど、」

「食べるー！」

「はえーよ」

珍しく及川も加わり5人揃つてのお茶だ。
騎士団の話や戦争の話など、色々と聞く。

エトランには侵略が始まつていなが、やはり時間の問題だという。
もしも東隣の国^{アステ}が勝てば侵略はないが、おそらく負けるだろうとうのがエトランの見解らしい。

「あ。トーカー！」

白蛇が春日の肩からテーブルの上に移る。
及川がさりげなく距離をとる。
そして白蛇がロールケーキを、食べた。

「……蛇ってケーキ食うんすね」

「変わった蛇だな

「トーカは一応、魔物に分類されるらしいので……蛇とは違つんじやないかと……」

魔物がケーキを食べるのも、十分不思議だけどな。

翌日、回復系魔術の授業が始まった。
春日の腕には白蛇が巻きついている。
及川がいなくて良かつたと思つ。

「あまり得意ではないのですが、一応教えることは出来るので……

元々回復系魔術の使い手は多くない。

都合がつかなかつたのか、回復系魔術の講師もエディのようだ。

「回復系魔術の種類から説明しますね」

回復系魔術はその名の通り、回復する魔術である。

怪我の治癒だつたち疲労回復だつたり、その内容は様々。

この2種類に関しては“精霊の巫女”と呼ばれる回復系魔術の才能の持ち主でなくとも、使い手がいるらしい。

あとは解毒や浄化といったものもある。

解毒の魔術もそのまま、毒を解す。

浄化の魔術もそのまま、浄化。

が、この浄化は種類があり、衣服の汚れを落とすものから呪いの解除まで含まれる。

「カスガさんは今後、白の塔で生活してもいいことになります。そこで仕事も『えられます』

「白の塔?」

「はい。城の敷地内にある、その名の通りな白色の塔ですね。精霊の巫女が住まう場所です」

要するに、寮?

「精霊の巫女は外に住むとわざと面倒で、白の塔での生活を推奨しています」

「面倒って何なの?」

「毎日癒してくれと殺到されますよ」

「.....」

「あの.....それってわたし、ひとりですか.....?」

不安げにエティを見上げる。

「うつ.....そう、なりますね」

春日の攻撃。

エティはダメージを受けた!

などと妄想しつつ、説明を聞き流す。

「私も白の塔に住みたいんだけど」

「アーティカリは精霊の巫女ではないので……」

「特例作ってー。」

「そんな無茶な！ 白の塔は精霊の巫女と侍女しか？」

「はいけってー。」

早いな。

しかしこれで全員の方向性が決まつたことになる。

「認められるかどうかはわかりませんが、話は通しておきます。それはそうと今後のことですが、共通語と魔法の授業はもう十分ですので、魔術について少し授業して……そうですね、一月後くらいにはそれぞれ後見人を紹介できるかと思います。まあ大体決まっているんですけど」

「決まつてること一ヶ月？」

「書類とか手続きとか黙らせるとか色々あります」

黙らせるのか。

「虽然アーティカリの四大公爵家に引き取られることがなりますので、不自由はない」と思っていますよ」

「それは良かつたつす。色々道具開発したいんで援助あてにしてるんすよ」

「才能もあるし、ジローさんの開発は面白やつですね」

道具つくりのための基礎である、魔記印を刻むこと。
これは中々難しきものらしく、滋郎には才能があるといつ。

「まずは先輩の武器を作りたいっすからね」

「おお、武器ですか。どうこうする所[所]ですか?」

ヒーリーと滋郎が嬉々として武器の話を始める。
回復系魔術の授業はビリした。

本日の試作はタルトである。

タルト生地にアーモンド生地をいれて焼き、スポンジとカスタードクリームを挟み、フルーツを飾る。

空焼きしてレアチーズを流しても良いな。

同じ生地でクッキーも作れる。

これにはチョコレートクリームを挟もうか。
それからプレートにも利用しよう。

クッキープレートに文字を書くのだ。

お誕生日おめでとう、とか結婚記念日、とかそういうプレートである。

イグレットィオに確認したところ、文字を書くサービスといつのは
ないようなので売りにしてみることにした。

サービスといつても有料である。

クッキープレート一枚購入で文字入れ致します、と。

この世界^{イタリア}というより^{エトラン}国は、無料なものが少ない。

日本でも買い物袋やごみ袋の有料化が進んでいたが、レジではさら
にケーキの箱までも有料だ。

紙が高いからかもしれない。

そうなると持ち込みも多いらしく、中には鍋を持つてくる強者もいるとか。

ちょっと見てみたい。

「大分商品も揃つたな」

壁にも花や風景画が描かれ、明るい雰囲気になり他店と比べ遜色のない程度に種類も増えた。

焼き菓子の陳列も籠などの小道具を使い、ギフトも用意してある。どうにか箱が安く手に入れば、もっと色々出来て良いのだが。

「オープンが楽しみです！」

「客、戻つてくれればいいな」

「！？」

元々評判が落ちてこの様なわけで。
そう簡単に戻つてくれるかどうか。

と、いうわけで試食と売り込みを考えた。

試食は単純に店の前で配るというだけなのだが。

この町のレストランで、料理はおいしいのにナガートはマイマイ、
という店をピックアップ。

その店にケーキを売り込むという案である。

それだけで売り上げになるし、そこで評判になれば集客になる。
オープン前に売り込んでおきたいところだ。

候補は現在、滋郎と一人で食べ歩きをしながら探している。

「あ、そうだ。俺明日からちょっと籠りますんで」

候補のレストランから出で、滋郎が弾んだ声で宣言する。引き籠もり発言つて嬉しそうにするものだつただろつか。

「は？ 店どうすんの？」

「先輩に任せます！ 僕ちよつと急いで武器作りたいんですよ」

「何で」

「魔物討伐2回目、そろそろじつにっす。先輩が無双する武器をちよといと」

ちよことつてそんな簡単に出来るものなのか。

「なんでリゲルさん誘えばいいんじゃないっすかね。ここの人だし、一応女の人だし」

「一応つてお前……でもそうだな。それも良いかもな」

この世界では初デートである。

リゲルが誘いにのつてくれれば、であるが。

好意の有無はどうであれ、かわいい女の子と2人で出かけるというのはちよつといい気分だ。

戻つたらせつそく誘つてみよ。

「マコも来るのか？」

誘つてみて第一声がそれつてどうよ。

「いや一人で行きたいんだけど」

「マコも誘いたいんだが」

「わかった。今回はマコも誘つ

でも次回は誘わない。
何が何でも誘わない。

つかこれ脅ないよな、完全に。

「いやー何が「メン！」すげ期待に満ちた目で誘われたから断りにへへへ

確かにあれでは断れまい。
真琴に罪はないと思つ。

城下町の大通りを歩きながら、真琴は手を合わせた。
前を行くりゲルは、おぼろげな記憶を頼りに田印を探している。
いつもは連れて来られているらしい。
一体誰に。

その店は何でも、大通りから細い路地に入つたところにある、知る人ぞ知る隠れた名店であるといふ。

メニューはなく、おまかせの料理しか出でこないその店は、「デザートがないらしい」。

中々好都合である。

日本の飲食店は「デザートがない店を探す方が難しいが、こちらでは逆だ」。

それがケーキ屋が6店舗もあり成り立っていた理由なのかもしけない。

「この国で「デザートは家で寛ぎながら食べる、という人が多い」

なるほど。

道理でイートインの出来るケーキ屋がないわけだ。

人数に余裕があればイートインもしてみたいが、今のところは無理である。

そもそも売り上げがないと今の人数から増やすことも出来ない。

ようやく探し当てたその店は、黒い重厚な扉の向こう側。革張りのソファのある、高級感のある店だ。

「いらっしゃいませ、リゲル様」

「いつもの席は空いているか?」

一番奥の仕切られた個室風のソファ席がいつもの席らしい。

「好みの食材や嫌いな食材を言えば考慮してもらえる」

「あ、私、味が濃いものが食べたい」

確かにこの国は薄味だからな。

「じゃあ魚介系で」

「ではそれで頼む」

「かしこまりました」

一礼して、従業員が下がる。

出て来た料理は魚介のトマトクリームスープと塩の効いたフリット。野菜サラダのドレッシングはナッシュのペーストが入っているようで濃厚。バケットのトーストはガーリックとトマトの酸味が効いている。

「美味しい！ フリット最高……！」

「皿」

素材は新鮮。

味は濃い。

特にこのドレッシングはかなり好みだ。

食後にお茶を頂く。

すっきりとした味わいで、消化を助ける効果があるらしい。

「今度滋郎を連れてくるか……」

「それがいいね！」

濃い目の味付けというだけで高ポイントである。

「好評な様で何よりだ。」の後は遊びある?」

「んー……結構来てるしなあ。リゲルのおすすめは?」

ネタギレのようだ。

「せうだな。町の外になるが、案内したい場所がある」

城下町の正門を出て右に曲がった。

城下町の外に出たのは2回目。
前回は左に曲がり森へ入った。

ゆるやかな丘を上り、見下ろすと城下町が一望出来る。

「おーー!」

丘には巣穴のようなものがあり、その横にはアカの実がたくさんなつていた。

「リゲル、これは?」

巣穴を指差し、尋ねる。

「それは以前話した武器がある祠だ」

なるほど。

その祠は侵入出来ないように結界が張られているようだ。
貴人はまだ結界の魔術を使えないが、知識としては知っている。

「ここは、すべてのはじまりの場所。英雄の生まれし場所」

「英雄？」

「ああ、アカの英雄だ。すべてを、エトランを創った人物。」

すべてを創ったと言われる人。

国を作った人。

「とても。とても素晴らしい人だった」

リゲルが少し悲しそうに微笑む。

リゲルは700年以上生きているけど、英雄はおそらく普通の人間だ。

700年。

それだけ生きていれば数多くの別れを経験しているはずだ。

「私は英雄の意志を継ぐもの。召喚は英雄の意志であり、私の意志」

「そうしなきや、いけなかつたんでしょう？ 別に私達は恨んでないよ」

「……ありがと」

恨んでいなくても、真琴はきっとつらい。

春日も、及川も。

滋郎は微妙だが。

「なあ、逆召喚つて本当に出来ないわけ？」

「……今のところ、出来ない」

「ふーん」

今のところ出来ない、ねえ。

ついには研究すれば出来るかもしけないってことか？

「 もうやめ、やめよう。」

リゲルと別れ、部屋に戻る途中。
真琴が声を潜め唐突に言い出した。
なぜここで。

戻つてからで良くないか。

「 何かあつそうだよな」

「 やっぱり思ひへ、どひするへ、歸るへ。」

「 滋郎はおいた方がいいだ。及川と春田は顔に出る」

「 うん、賛成」

そのまま滋郎が籠つている部屋に向かつ。

籠る宣言をしてから、仮眠用のベッドのある簡易工房を借りている
のだ。

本気で籠るじしべ、昨晩は戻つて来なかつた。

簡易工房は地下にあつた。

泉のある部屋の斜め向かい、軽く防音が入つてゐるじしべ、音漏れ
が少ない。

「 ジロー、はかどつてる?」

元気よく真琴が扉を開ける。

「こりゃ休憩中だつたらしい滋郎と田が合ひ。

「こりゃしゃー。今試作品が出来たといつす」

作業台の上は乱雑。

工具の類やよくわからないものが散乱している。

ちよつと楽しそうだ。

工作は嫌いじゃない。

「これど、これが先輩の武器の試作品つす。今度外か訓練場で試してみてください」

渡されたのは物差くらいの、筒状の棒が一つ。

「鍛冶屋の人に原型の武器作つてもらつてゐるん、まだかかるんすよ。特注なんで手間取りそつつす」

特注つて一体何を頼んだといつのか。

「楽しそうだな」

「樂しこりますよー。先輩もやつましょひーー..」

「それも良いな。

「やうだな、ちよつとやつてみたいかも」

「まじつかー。じゃあ時間取れそつな時来て下さこつすー..」

「えー、じゃあ私もやつてみよつかなあ」

「マ」「先輩もやつましょーよー。楽しいですよー。」

真琴は細かい作業を面倒くさがるのだが、大丈夫だろ？
まあ飽きたら止めれば良いだけの話なのだが。

「あ、そうだ。ジロ、帰る方法ってあると聞つ？。」

「あると聞つ？。」

「根拠は？」

「ないつす。でも行きがあるなら帰りがあつてもおかしくないつす
よね。リゲルさんも何か隠してる感じがするし」

「滋郎もやつ思つのか」

「リゲルさつすか？ そつすね。でも悪じよつはなうないと
思つ？。」

「まあ悪意があるよつては見えないよ

確かに悪意はなさうだ。

罪悪感はあるようだが。

「何にせよ協力体制でいた方が良いつすね。戦争が終われば帰れる
可能性も高くなつそうつす」

一応そのためによばれたのだ。

目的を達成しないと、あちらも困るだろう。

そしてやつてきました、魔物討伐2回目。

今回は貴人・滋郎・真琴の3人だ。

精靈の巫女となつた春日は、討伐の参加が免除となつた。

滋郎の作つた試作品を預けられているので、今回はきちんと戦わないと。

一応訓練場で少し触つてみたので使い方はわかっている。

前回は森の中で見通しが悪かつたが、今回は草原。木がところどころに生えているが、見通しは良い。遠くでウシ型の魔物の群れが草を食べている。食べている先から毒沼が広がっているようだ。

「と、いつわけで今回はフビイだ。見ての通り毒をもつているので気をつけるよ！」

魔物の討伐は、無差別ではない。

攻撃しない限り無害な魔物も多いので、その辺りは無視。討伐は有害なものに限る。

人を無差別に襲う魔物、作物を荒らす魔物、毒を撒く魔物など。

今回はその毒を撒く魔物だ。

「戦闘開始！」

隊長の声掛けに一斉に動く。
四方から囲い、一気に叩くのだ。

全員がポジションにつき、構える。

魔物が周りに気付いたようだがもう遅い。

貴人が魔法を放とうとした、その時。

傍らの木に実がついていることに気が付いた。

「ゆ、ず……？」

形も色も、香りも柚子だ。

その大きさだけが違う。

貴人の知る柚子の2倍ほどの大きさ。

「でっけえな

味をみたい。

一つもいで噛り付く。

皮は苦く、実は酸っぱい。

そして独特の香り。

「うん、柚子だ」

店には並んでいなかつたが、この世界には柚子があるらしい。
森や山は私有地ではないので持つて帰つても問題ないと聞いている。

「ラッキー」

じつは柚子、好物である。
焼き魚に絞るのも良し、ゆず系ドリンクも良し。

大量にとつてゐるマーマレードにしてや。

などと考えている間に、魔物は絶えていた。

「やべ

また何もしていない。

翌日。

引き籠もり中の滋郎を引き摺つて、例の店へ行つた。案の定滋郎も気に入つたらしく、さつそく交渉開始。一日限定10食分、デザートの売り込みが決定した。売れなかつたら払い戻しするので、相手に損はない。そうでないと人気も知名度も何もないケーキ屋は相手にされなかつただろう。

まずは様子見、10食。

もしもこれが完売するのであれば仕入れを増やしてもらえる。
安定した売り上げとなれば払い戻しもなしとなる。

「あのお店につきり閉めたんだと思つたら、新しい職人さん呼んだのねえ」

このピストロ風のお店は店主である浅いおじさんと奥さん、その娘さんと息子さんの4人でまかなつてゐるらしい。

「若いけど腕は良いのね。美味しいわ」

娘さんは20代後半くらいのスレンダーな美人。

他国に嫁いでいたが最近戻ってきたとか。

あっけらかんと本人が話していた。

息子さんは前回店にいた人である。

素早いし動きも綺麗、営業スマイルも完璧。

女受けしそうで羨ましい。

少なくとも丑つき悪い、怖いとは言われたことないだろ? な。

「これだけの好条件なら」ちらりとしては不満もないしね。よろしく
頼むよ」

渋い。

口髭も渋いが声も渋い。

「 ジョナサン、よろしくお願ひします」

滋郎と二人で頭を下げる。

オープൺはまだ先だが、まずは一步。

店のオープンはまだ決まっていないが、ビストロへの搬入は決定した。

向こうの担当者である娘さんのメリッサさんと話し合って、5日後の最後の魔物討伐を終えてからと「うじ」と元。

魔物討伐が日を開けた5日後と決まっているのは、魔物の活動期間の都合らしい。

よくわからん。

とにかくオープンの日取りはビストロの様子を見て、タイミングをはかる。

それまではがつり仕込み。

宣伝活動としてエティヤリゲルに話しておいた。
こうじうことやるらしい、といつ口口ミである。

顔が広い一人なのでそこそこ広まるのではと見込んでいる。
紙媒体を使った広告チラシがない世界なので、これが一般的だ。
さてうまくいけば良いが。

「三度目の正直って、豈ひません？」

「豈ひな」

「フジムさ、3回とも何もしてないよね？」

「そうだな」

「……せっかく武器作ったのにいいいい

部屋の片隅で嘆く滋郎。

滋郎の作った武器は一度も実践で活躍していない。

貴人の武器だけしか作っていないからだ。

「だからごめんって言つてるだろ。しょうがないじゃん、カボチャがあつたんだから

3回目の魔物討伐中、通常の3倍くらいの大きさのカボチャを見つけたのである。

中身もずっしり入つていて重い。

大きいカボチャは薄味大味なことが多いので、これもその可能性が高い。

しかしあま煮詰めれば使えるだろうと一つ、持つて帰つて来たのである。

「フジムの中では重要なんだね、そこ……」

「ホラ、お前カボチャ好きだろ。かぼちゃプリン作るしさ」

「ううつ……！」

「パンプキンパイも作るか？」

「くつ……一生ついていきます、先輩！ なんでカボチャコロッケもー！ 是非に！」

「早つ！ 早いよジロ！」

カボチャの菓子に釣られる男・宮尾滋郎。

真琴がずずつとお茶を飲みながら思い出したように言つ。

「そういうえばジロがフジムに懷いてるのってなんで？ 中学時代部活違つたよね？」

貴人は途中で辞めたが野球部、滋郎は文芸部の幽霊部員だった。もつとも文芸部は幽霊部員しかいないような部活だったが。バイト先は同じだが、それは高校に入つてからのことである。「俺が自殺しようとしてたとき、先輩に助けられたんすよ

「うわ、いきなりヘヴィ！」

「やー、先輩いなかつたら俺確実に死んでたつす」

「え、フジムが死んだら両親が泣くぞ、みたいなこといつたの？」

「まさか」

「むしろお前が死んでも何も変わらないし、無駄死にだる的な感じ
つすね」

「……ひどい、ひどいよフジム」

「いや自殺前とか知らねえし。偶然、偶然」「
しかもそんなこと言つてない。

だいぶ違う。

滋郎の中でそうなつているのか、ごまかしたのか。
まあどっちでも良いけどな。

「なんにせよ救われたのは確かにんっす」「

「あー！ あーあー、わかつた。なるほど、うん」

真琴の中で何か閃いたらしい。

何か思い当たることがあったのだろう。

「というわけで先輩！ カボチャプリンとパンプキンパイ、食べた
いつす！」

「はいはい。ついでに夕飯も作るか。調味料もスペイスしか残つて
ないしな」

そうなのである。

液体系・ペースト系の調味料はすべて試食した。

なのに残念ながら醤油も味噌も存在せず。

これはもう開発しろってことなのか。

溜息を吐きながらスペイスを開封。

結構種類があるので舐めてみてから考えよう。

色々組み合わせも出来るだらうじ、今日は無難に鶏肉のスペイス焼
きでも作ろうか。

上手くいけばカレーも作れるかもしねない。

スペイスを種類ごと器に入れる。

一つずつ舐めていく。

何となく食べたことのある味、まったく知らない味、色々だ。

「ん？」

懐かしい風味を感じ、再度舐める。

「違うか……」

どうやら氣のせいだつたらしい。

残念すぎる。

鶏肉に合ひそうなスペイスを数点選び、調合してみる。
無難な味。

下処理をした鶏肉に塗り込み、冷蔵庫で冷やす。
その間に副菜やカボチャ菓子の準備も進める。
パンプキンパイはさすがに間に合わない。

今日はカボチャプリンにしよう。

大きいが味が薄いカボチャは蒸し焼きにして濾し、鍋で煮詰めた。
面倒だがこうすれば水分がとび、味が濃くなる。

副菜は何にしようか。

せつかくだらスペイス全種類使ってみたいんだよな。
まだ使っていないスペイスを適当に調合していく。
味をみて、合ひそうな副菜にしよう。

今日は組み合わせ云々は気にしないでもらいたい。

「あ」

そういうことか。

スペイスは個々の味がしつかりしているが、組み合わせでかなり味
が変わるようだ。

日本で手に入るスペイスとはだいぶ違う。

「これは……いいな」

面白くなつて来た。

色々実験しよう。

「フジム！ これー！」

軽く興奮状態の真琴がぶんぶんと手を振り、何かを伝えようとする。わかる、わかるけどわからない。

「先輩！ これー！」

「真似すんな」

本日の献立は鶏肉のスパイス焼き、野菜炒め、ほうれん草のお浸しもどき、白米、味噌汁もどきである。

「醤油！ あつたんすか！」

「スパイスの調合で味噌とソースと醤油は何とかなる」

問題はスパイスな点だ。

粉末なのである。

水で溶かすと薄くなるので、醤油をかける料理が難しい。刺身に粉末つけて食べるって何か嫌だし。

柚子果汁で溶かしポン酢にするのならいけるかもしねない。

「フジム最高！ 春日ちゃんとミツチーも喜ぶね！」

「おう。組み合わせを厨房の人伝え使ってもらえうつに頼んでおく」

春日は一緒に生活しているがまだ帰つて来ておりず、及川は騎士団の専用の食堂を利用することになっている。

自分達もそれぞれ別の貴族に引き取られるのなら、各自持つて行きたいところだ。

「デザートはカボチャプリンな。パイは明日作るから」

ああでも良かった。

これで食生活はおおむね満足である。

翌日、道具作りの日。

滋郎の籠つている部屋で色々教えてもらい、実際に作つてみよつと
いうことだ。

真琴と貴人、エディと何故カリゲルもいる。
春日は精霊の巫女として色々修行中らしい。

部外者禁止なのでさすがに真琴はついていくとは言い出せなかつた。
「わかりやすいもので説明しますね」

そう言つてエディは滋郎の試作品を取り出す。
貴人が使わなかつた筒状のアレだ。

「キイトさんが訓練場で見た透明の剣と同種ですね。……」

筒の先から水の刃が出てくる。

「手元に彫つてあるこの魔記号が、この武器を維持するためのもの
です」

刃と固定を意味する魔記号などが彫られている。

ただ属性は指定されていない。

属性は自分で指定出来、発動させなくてはいけない。

「この手のタイプは自分の魔力をを使います。が、魔記号だけでこの
武器を出すよりも消費量は少なくて済む利点があります。もちろん
魔動石を使うように改造も出来ますが、そうすると戦闘中は面倒な
上、重くなりますからね」
確かに。

魔動石を持ち歩くのは大変そ�である。

「次はこちら。魔動石を動力にした一般的なものですが
以前見たランプである。

下部に魔動石入れがあり、そこからエネルギーを抽出、稼動する。

自分の魔力を使うものと違う部分は、エネルギーを抽出する部分の魔記号だけだ。

これは魔法も同じで、魔力が少ない人間が魔力消費の多い魔法を使う場合、魔動石を使って補うことも出来るらしい。

現時点では貴人たち5人には不要な知識であるが。

「基本はこれだけですので、簡単です。魔記号を彫る専用のナイフがこれですね」

一見彫刻刀である。

違う部分は習っていない魔記号の羅列。

「大抵のものは魔動石で動きます。魔力で動くものは使い手を選んで特注が多いんですよ」

以前魔力が多いのは異世界を渡ったからだと言っていたので、こちらの世界の人はそう多くないのだろう。

「このペンのように魔力の消費が少ないものは使えますけどね」

滋郎が改造した万年筆である。

エディとリゲルも持っているようだ。

「ナイフは高いものでもないし数もあるので、お一人一本ずつ持ち帰つて結構ですよ」

有難く頂戴して、さつそく道具作りである。

エディの延々と続く魔動具蘊蓄をBGMに着々と作業を続ける。

衛生面が整っているのも魔動具何だとか。

風呂とかトイレとか、確かにあつて良かつたよな。

手元に集中していると、真琴に声を掛けられた。

細かい作業が得意ではない真琴は、さつそく飽きてきたようだ。

「フジム、何してんの？」

「いやちょっと実験……よし」

出来上がったものを軽く投げてみた。

魔動石が床に落ち、発光する。

「おーバッヂリじゃん」

なるほどなるほど。

彫られた魔記号が自分に適性がなくても稼動することはわかつていた。

家電もどきが良い例だ。

実験したかったのは魔動石に直接彫り込んで大丈夫かどうかだ。使い捨てで良いのでいちいち器の用意なんで面倒だし。

「防犯に良いかなと思って。店に置こうかと」

ペイントボールとか田くらましとかそういう類。

イグレッジオは戦闘向きじゃなし、ちょうどよそうだ。

今のところあの店に強盗が入ることはなさそうであるが。

「何？」

気が付くとエディトリゲルが呆然と貴人を見ていた。

「……いや……その発想は無かつたな、と」

「逆に新しい発想だ」

魔動具で真っ先に出てきそうなものだけだな。

「非常用の水とか火とかにもなるな。属性外のものじゃないと意味無いけど」

「良いですね。キイトさんもジローさんと一緒に開発部で働きませんか？」

「いや俺ケーキ屋だし。滋郎はその開発部で働くわけ？」

「臨時職員つて形で良いのでつて誘われてるんつす」

「おー、いいじゃん。お前向ぎだな」

「なんで兼業考えてるつす。あと他にも色々やりたいこともあるつすよ」

「まあケーキ屋は俺一人でも良いし、好きなことやれよ
忙しくなつたら人員を増やせば良いし、滋郎は滋郎でやりたいことをやるべきだ。

「やりたいことは全部やるんで、ケーキ屋でももちろん働きますよ
見た目に反して活動的だ。

いや元の世界でもやたら活動的だつたけど、
インドアな部分で。

「そろそろメシ作つてくる」

真琴リクエストのオムライスだ。

「見学しても良いか?」

意外だ。

料理に興味があるとは思わなかつた。

リゲルと共に厨房へ。

材料は頼んでいたので揃つてゐる。

チキンライスの味付けはトマトソース。

それにスペイスを混ぜた。

この世界にケチャップはたぶんない。

トマトもあつてスペイスもあるし、似た様なものは作れるだろうが
頻繁に使うものではないので作つていないのである。

たまごは半熟ふわふわを被せ、最後にスペイス多めのトマトソース
をかける。

サラダとスープを添えれば出来上がり。

「手際が良いな」

「元の世界で働いてたからな」

オムライスはたまご工房の人気メニューだ。

休日の昼間など何食作つていたことか。

「そういえばリゲルつて普段何してんの?」

「普段……? 来客の対応とか、書類整理とか……」

何か魔女っぽくない。

「魔法も魔術も得意だ。この国で一番の実力だと自負している。だがそれと普段の仕事とは結びつかない」

魔法を使う仕事、魔術を使う仕事、色々あるだろうがそれ全部を一人でまかなうこととは出来ない。

何人分か出来たとして、あまりやりすぎるとあぶれる人間も出でく

るだらう。

「地位はあるが引退しているというか……相談役、といつのか」

引退。

むしろ退職。

確かに定年退職してゐる年齢ではあるよな。

見た目はともかく。

リゲルを見る。

同じ年頃の女にしか見えない。

銀色の髪がさらりと流れ、綺麗だ。

猫目で美人系。

いいな。

欲しい。

「リゲルは今まで独身？」

現在独身なのは知つてゐるが、今までがそうであつたのかはわからない。

700年以上生きていれば結婚したことが数回あつてもおかしくない。

「伴侶を持ったことはない。いずれ死に別かれるとわかつていて、一緒になるとは思えない。それに……大抵は赤ん坊から知つてゐる相手だぞ？ 意識出来るわけもない」

「あー どうか、犯罪っぽいわ」

下手すれば相手の両親、祖父母も赤ん坊の頃から知つてゐるパンもあると。

懇意にしていればなおさら会う機会もあつただらうじ。

「それでいうとさ、俺は？」

「は？」

「俺の赤ん坊時代は知らないだろ？」

「知らない、が……」

意図をわかりかねてゐるのか、迷惑してゐるのか。

返答が鈍い。

「だから、俺を好きになれば良いんぢゃないかな
リゲルの手を握る。

細くてさうさうしている。

「死に別れるって、は年月は違えど誰でも一緒に
リゲルの顔が若干赤い。

良い兆候だ。

「俺を意識して、俺を好きになつて」

その指先にキスしてみた。

結果。

フラれました。

とはいっても顔は赤いまま、「何を言つてるんだ!」と怒鳴られただけだ。

フラれたというより相手にされなかつたというべきか。しかし意識はしているようなので、今はこれで良い。

今は、ね。

「フジム、何あぐどい顔して笑つてんの?」

「あぐどい顔つて」

「何かサディスティック?」

「変態か」

気を取り直して。

いよいよ貴族に引き取られる日である。

そのことでHディが部屋を訪ねてきた。

「それでは説明致します」

小さく咳払いし、話を始める。

「まずミナミさんはフレネス公爵家を後見として、白の塔にて生活して頂きます」

白の塔については以前聞いていた。

てつくり貴族の後見はないものと思っていたのだが。

フレネス公爵夫人は結婚前、精霊の巫女として白の塔で暮らしてい

たらしく、是非にということだ。

春日にとつて悪い話ではないだろう。

「マコトさんはランル公爵家です。騎士団の訓練で顔を合わせてると思いますが、

真琴がたまに訓練に参加している王宮騎士団には、女性騎士が少数存在する。

その中で一番の実力者であるシャナル・ランルが、真琴を是非と父親である当主に頼んだようだ。

真琴はランル公爵家の屋敷には住まず、春日と共に今日から白の塔に住むことになっている。

表向きは侍女なのだが、騎士団にも所属し、護衛も勤めるという。「そして最後にジローさんとキイトさん。お一人はわがカネル公爵家です」

「え、2人一緒に？」

「まあ色々あります」

聞き返した真琴にエディは苦笑いで答える。

その様子を見て、貴人は唯一戦つていない自分が問題だったのだろうなど中りをつけた。

過ぎたことはどうしようもないが。

さてそんなわけで、正式な名前はキイト・カネルとなつたわけだ。

年齢的に貴人は三男でジローは四男。

領地は城下町より大分遠くにあるらしいが、住まいは今エディが住んでいる屋敷に居候である。

城下町の一角にある貴族の多い屋敷街。

2人とも仕事があるので考慮してくれたのだろう。

貴人はケーキ屋だけだが、滋郎は結局ケーキ屋と開発部、他にも色々やることがあるので城下町にいる方が都合が良い。

それぞれの住居へ、今から引越しだ。

借りていた部屋は念入りに清掃され、客室になるのだらう。

「それでは屋敷に案内します」

エディに連れられ、城下町を歩く。

今ではすっかり見慣れた風景。

城を出てすぐに屋敷はあり、エディと滋郎には便利そうだ。

残念ながら店からは結構距離がある。

歩けない距離ではないのでかまわないと、自転車とか原付とかあれば便利なのに。

門を潜れば庭園。

石畳を歩き、玄関へ向かう。

小さな池とその周りには背の低い植物が生えている。

花はあまりなく、華やかというより青々しい感じだ。

「門番はいません。ですが不審者が入り込めば魔力が感知されるのでわかる仕組みです」

人間すべてが魔力を持っているので生体反応と同じようなものか。

「この屋敷には私と、住み込みの使用人が3人とその子供が一人いるだけです」

言いながら扉を開ける。

ちょっととぼつちゃりとしたかわいらしげメイドが出迎えてくれた。

「おかえりなさいませ、エディ坊ちゃん」

「坊ちゃん……ッ」

噴出さないよう堪える貴人と笑う滋郎。

「坊ちゃんまつて！」

「マチルダ、坊ちゃんはやめて欲しいと……」

「ですが坊ちゃんは坊ちゃんですから。はじめまして、メイドのマチルダです。キイト様、ジロー様、よろしくお願ひします」

「キイトです。よろしくお願ひします」

「ジローです。よろしくお願ひします」

「ジローです。よろしくお願ひします」

揃つて頭を下げる。

「まあまあこれはは」丁寧に。お部屋に案内いたします、こちらへどうぞ」

若く見えるが言動がちょっとおばけやんっぽい。

じつは若くないのかもしねないが、聞くのは失礼だろう。

やめておこう。

「右がキイト様、左がジロー様のお部屋です。荷物を置いたら屋敷内の案内をいたします」

部屋は城で借りていた部屋と同じような感じだ。

さすがに一部屋だが、かなり広い。

扉近くにテーブルと椅子、奥にパーテーションがありベッドがある。

美術品の類はない。

椅子の上に荷物を置いて、部屋を出た。

トイレや風呂、食堂などの場所を聞き、使い方などの説明を聞く。一応食事の時間は決まっているが、事前に伝えておく」とですらしてもらうことも可能。

風呂も声を掛ければいつでも使える。

勿論非常識な時間に使うつもりはないが。

この屋敷の主はエディなので特に挨拶もなし。

当主であるエディの父親は領地にいるため、そちらの挨拶は見送り。それで良いのか疑問に思ったが、エディの父親はそういうことを気にしない変り種のようだ。

納得。

そもそも遠いのでエディも仕事があるしで連れて行けないとのこと。食事はエディの計らいでスペイスや調味料を使ってくれるらしい。

ありがたい。

マチルダの母親のメイサが料理人で、父親のヨハンは執事。一家で使用人で、マチルダの娘と息子もこの屋敷に住んでいる。旦那は早くに亡くしたらしい。

元々領地の屋敷に勤めていたらしいが、娘の学校のためにこちらに来たという。

何でも有名な女子学校があるらしい。

学生向けのケーキも考えるか。

「あ、言い忘れてましたが、貴族には騎士に属する義務があります。本職がある場合、臨時の騎士という扱いですが」

「は？」

「お二人は討伐隊の所属になります。一定期間こと、その期間に人手が足りなくなつた場合に呼び出されます。所在地出現地次第なのでその半年に10回出動する人もいれば0回の人もいます。ちなみに私は長男ですので、免除です」

殺意が湧いた。

会議室に宰相と魔女、それから四大公爵家の代表者が集まつた。

魔術のカネル。

武力のランル。

人脈のフレネス。

資産のロア。

エディことエドワード・カネルはカネル家次期当主としてこの会議に参加する。

現当主の父親はこの会議、というより救世主召喚すべてに関して面倒臭がり、引き籠もつていて。

おそらく午前中のこの時間は惰眠を貪つていることだろう。

救世主云々に関しても、というよりほぼすべてなのだが、カネル家の実権はエディが握つていて。

「さてそれでは、改めて救世主と共にこの世界にやつて来た4人の後見を頼みたい」

リゲルの言葉に真っ先に反応したのは、ランルだ。

「マコト・サワラとジロー・ミヤオはランル家が責任を持つて保護しよう!」

やはりか。

魔物討伐で先陣を切つた二人だ。

強い人間が好きなランルらしい選択。

しかし個人としてもカネル家としてもそれはまずい。

四大公爵家とは名ばかりで、実際に権力を持っているのはカネル家だ。

続いてランル家という具合だ。

権力云々に固執したくはないが、魔術の研究にかなりの国家予算を割いているので仕方が無い。

もしもランル家がカネル家の上を行ってしまえばその予算は削られ、騎士団に持つていかれるることは明白。それだけは避けねばなるまい。

予算に関しては譲れない。

「せっかく公爵家も四家なのです、一家に一人保護すれば良いではありませんか。ジロー・ミヤオはカネル家が保護します」「私もそう思います。我がフレネス家はミナミ・カスガを保護しましょう。妻は元々精霊の巫女ですから、その方がミナミ・カスガも助かるでしょう」

ランルは悔しそうに顔を歪め、睨んでくる。

これだから単細胞は。

「それではロア家にキイト・フジムラといふことによろしいか?」「……まあ、仕方ないでしょ?」

渋々といった風に了承する。

予想通りの反応だ。

「不服ならキイト・フジムラもカネル家で保護しましようか」

ロア家は四家の中で一番資産が潤沢だ。

税で潤い、商売で潤い、何より出費にも煩い。

つまり無駄な人員など要らない、とそう考えるはずだ。

今回召喚された4人は使用人として引き取るのではない。むしろ優遇しなければならず、本人が希望すれば大きな出費もある。ロア家がそれを厭わないはずがない。

ロア家がそれを厭わないはずがない。

「まあ、当方としても、それは助かりますが」

「ジロー・ミヤオとキイト・フジムラは仲が良いようですから、一

緒だと知れば喜ぶでしょうし」

「力ネル家がキイト・フジムラを保護するのならば、ジロー・ミヤ

オはランル家が……！」

「何を言っているのです。一人が一緒だと喜ぶだろうと言っているのに。それにもう一人というならばキイト・フジムラを保護するのが筋でしょう」

「くつ……」

「決まつたな。キイト・フジムラとジロー・ミヤオは力ネル家だ」

溜息を吐き、リゲルがどうでも良さそうに宣言する。

個人の権力は持つが、家族はなく、公爵家でもないリゲルにはあまり関心のない話なのだろう。

しかし、当初の予定通り、一人を確保出来て良かつた。

キイト・フジムラが魔物討伐で活躍しなかつたおかげである。エディはひつそりと笑った。

キイト・カネルになつて数日。

ようやくリゲルとデートに扱ぎ付けた。

マコが仕事で予定が合わず、偶然2人になつただけであるが。

前回同様ビストロで食事することになったのだが、今回はアルコール込ミランみだ。

この国イタリアでは16歳は成人なので、アルコールも注文できる。ボードに書かれているおすすめの食材の中から好きなものを選ぶ。今回はピグウという獣肉をアルコールのつまみに呑つようと注文した。

濃い目の煮込み料理に薄くスライスされたバケットのようなもの。浸したあとハーブを乗せて食べるらしい。

アルコールはアカの実のワイン。

酸味があり軽い口当たりで飲みやすい。

「店はどうだ？」

「ぼちぼちかな」

店の売り上げは3人分の給料を十分に払えるくらいとぼちぼちだ。店の純利益分はほとんどないが、給料が出るだけ上々である。

「まあ少しずつ客足は増えてるかな」

前に来ていた人が戻つて来たり、この店から流れて来たり。順調である。

「それは良かった。マコとミナミも問題なく過いしていよいよ……ああ、ワインのおかわりはどうだ?」

そうか。

一人とも何もなくて何よりだ。

特にマコの侍女なんて不安すぎるからな。

「いや、そりそりやめておく。明日は討伐隊に参加しないといけないから」

そう。

初の臨時の討伐隊参加である。

登録されて即とはどういうことか。

ジローの呪いか。

「魔物討伐か。明日はどこに？」

「あー……確かに西つってたかなあ。ピグウ討伐だつてさ」

「ピグウか。となると……また近いうちに食べられるな」

「食べられる？」

「ピグウが大量発生すると討伐隊が組まれるんだ。群れは危険だからな」

草食動物だし、むやみに攻撃してくることはない。

ただ1匹に手を出すと群れで襲ってくる。

攻撃は単純だが力が強いこと、数が多いことがネック。

慣れていないと大変だろう。

「量が多すぎるからその後食堂なんかに配布されるんだ。それ目当てで一般人が暴走しないように。まあ一般人に被害が出ないように取られた対策だ」

なるほど。

個人が狩りに行って負傷者が出ないように、か。

ピグウは繁殖率が高いため、よく大量発生するらしく、よく臨時の討伐隊が組まれるようだ。

ピグウの好物もあるアカの実も、一年に何度も収穫出来る。成長が異様に早いのは、魔力の影響ではないかといわれているが、まだ判明していない。

個人的には、この世界の食べ物と元の世界の食べ物で違うものは、魔力の影響があるんじゃないかと思う。

その証拠に同じ食べ物を食べても変化がないが、違う食べ物を食べると微量ながら魔力が回復していくように感じるのだ。

「せっかくだから、デザートプレートを頼もうか。キイトは？」

「俺は良いわ」

リゲルがデザートプレートを注文する。

デザートプレートは日替わりで、チーズケーキを2種類とアイス、果物とソースを添えたものだ。

今日はシューとチーズケーキでアカの実のソースと季節の果物を添えてある。

これは意外と人気があり、最初こそぎりきり10、といった具合だつたが、最近では20、30と出るようになつた。

ありがたい。

美味しそうに食べるリゲルを見て癒される。

ああかわいい。

しかしあれだ。

髪の長くて邪魔なのか、耳の辺りで押さえる。

その仕草も食事の時に結ぶ仕草もどちらも良いよな。

頃も良い。うん。

「リゲルさん、お久しごりです」

「ターシャ」

ビストロの女性店員が食べ終わる頃を見計らい、近付いて来た。

「お元気そうで何より。……ちょっと色々あって、戻って来ちゃいました」

「そうか」

「ふふ、やっぱり実家は良いですね。これからはもっとお店に来てくださいね！」

どうやら顔見知りらしい。

それはそうか。

元々この店はリゲルの紹介だ。

「ああ、また来る」

「ところで、お二人はどういう関係ですか？」

「え……」

リゲルが言い淀む。

珍しいな、即答しそうなのに。

「恋人候補」

「へー！ そうなんですか！ いいなあ、青春だなあ

「ちょつ……！」

しつと答えてみると、リゲルが慌てだした。

何故。

嘘は言つてない。

「俺が今一方的に口説いてるといんですけどね」

「がんばってね！」

「勿論」

「…………」

恥ずかしかったのか、顔が赤いまま、睨みつけてくる。全然怖くないが。

「そろそろ恋人に昇格つてどう？」

そろそろも何もまだデート一回目ですが。

「……帰る。明日は早いだら」

残念。

しかし拒否されなかつたので良しとする。
耳まで赤いリゲルを追い、店を出た。
ツケが通用するつて良いな。

「リゲル、送る」

「良い。すぐそこだ」

「そういう問題じゃないから」

強引に手を取り、そのまま繋いだ。

指を絡める。

「戦況はどう?」

「芳しくない」

せっかく手を繋いでいるところの上、色気のない話題を出してしまつた。

「戦場に行くのは本当に及川だけ?」

「……ああ

「残り4人は何のために呼ばれたわけ?」

「救世主はひとつだ。巻き込んで申し訳なこと……」

「そう言えって、英雄に言われた?」

リゲルがびくんと震え、手を払おうとした。

させないけど。

「5人、必要なんじゃねえの?」

リゲルが俺を見詰める。

会話の内容がこれじゃなかつたら良くなき雰囲気に持つていけたのになあ。

「正直に話してくれれば、協力できるかもよ?」

揺らいだ。

キイトはそれに気付いていないふりをしながら、優しく髪を撫でた。
「悪いようにはされないつてわかつてるから。リゲルを、信用して
る」

眉をきゅっと寄せ、皿を瞑る。

その眉間に歯を寄せた。

「今すぐじゃなくて良い。マロモジロも、正直に話せば協力していく
れると思つ」

しかしこんなにわかりやすくてよく國の裏としてやつていけてたな。
それほど平和だったってことか。

「いずれ、話す。今は、まだ……」

「待つてゐる」

そのまま無言で城まで辿り着いた。
ゆっくりと手を解く。

「また、誘つから
リゲルが小さく頷いた。

さて、ピグウ討伐である。

前回とメンバーも違い、初めて見る顔ばかりだ。
ジローとは時期をずらしてもらつた。

三人しかないので、一気に一人抜けると店が回らなくなる。

今までの三回は近場だったの徒步だった。

しかし今回のピグウの目撃場所までは少し距離があり、移動は走竜ランドラ
という移動用の魔物を使う。

この魔物は草食でおとなしく、従順ということで好まれて使われて
いるようだ。

一応二人乗りまでいけるのだが、今日はピグウも乗せることになる
ので全員一人で乗る。

実はかなり楽しみにしていた。

ジローほど漫画やアニメに興味はないが、小学校の時はそれなりに
ゲームをしていたこともある。

飛ばないとはいえ、ドラゴンランドラである。
番号札を受け取り、走竜を探す。

61番。

それが今回キイトが乗る走竜の番号だ。

番号順に並んでいるのですぐに見つかった。
片目に刃物傷がある。

「大きいな」

大きいと言つても馬くらいだらうか。

馬よりもゴツイので大きく見える。

そつと手を伸ばすと、威嚇された。

撫でたかったのに。

大人しいと聞いていたのだが、どうも違うらしい。

窮地に立たされているのでなければ、魔物は自分より強いものに逆らわない。

要するに強いことをわからせねば良いのである。

「よし」

魔力を開放してみた。

人間版の威嚇である。

走竜は小さく唸り、その場に伏せた。

「勝った」

大人気ないが、ようやく撫でることが出来た。
鱗に覆われた緑の体はごつごつとしている。

鱗なのに滑らかではないのが不思議だ。

「おー」

感動。

帰つたらジローに自慢しよう。

「さあ行くか」

61番を連れて城門前に集合した。

何か視線を感じるのは気のせいか?
気のせいじゃないな。

かなり見られてる。

口開いてますけど。

走竜^{ランドラ}に乗つて小一時間。

ピグウは農村近くの小高い丘に集まってアカの実を食い散らかしていた。

騎士約20人に対しピグウは約50。

一人頭2か3つてことか。

一斉に囲んで、一斉に叩くらしい。

何て安直な作戦。

作戦といえるのか？

ピグウは単純な動きしかしないし、一回に手を出すと他も一斉に向かって来るので一気に叩いた方が安全とのこと。キイトはジロー印の武器を腰に下げ、あとは借り物の革の鎧で軽装備だ。

重い騎士鎧を着ると動ける自信がない。

「今までと違い、一人前としてここにいるんだ。しつかり戦えよ。今回はピグウ討伐だし危険は少ない」と思うが

隊長から告げられ、頷く。

今まで戦闘に参加していないので言われて当然だ。

だがしかし、笑いながらこちらを見ている騎士たちは気に食わない。

顔を覚えておこう。

走竜たちを一部に集め、騎士だけがピグウを囲む。

ピグウは食用になるため、丸焼きの恐れがある炎の魔法などの攻撃は禁止されている。

そのため物理攻撃か、刃状の魔法など、出来るだけ死体に損傷がないものでないといけないのだ。

キイトの武器は条件に合っている。

武器を手に、構える。

「

風の刃が出現し、剣が出来上がる。

これで斬れば良いわけだ。

もちろん魔法を使っても良いのだが、人数が多いし外すと面倒である。

隊長が一発目、軽い魔法を打ち込むと、驚いたピグウたちが散り散

りに突進してくる。

それをバサバサと斬り捨てる、ただそれだけ。
特に何の感慨もなく、向かつて来たピグウを斬りつけた。
要は屠畜。

もちろん好んでやりたいことではないが。

それにしてもジローの作った武器は軽い。

刃の部分が魔法なので当たり前といえば当たり前だ。
おかげで片手で軽々と操作出来て、かなり助かる。
他の騎士が持つていいような剣は、確実に両手持ちになるだらう。
片手で持つとブレる。

笑っていた騎士に何か仕掛けられるのではと思つていたが、そんな
ことはなく。

非常にあつたりとある意味初の魔物討伐は終了した。
後は血抜きしたピグウを走竜ランドリに乗せて帰るだけだ。
このピグウは一番近い農村と、城下町などで配布される。
きっと騎士の宿舎ではピグウ料理が振舞われるだらう。

「よつやくー よつやく使つてくれたんすねー！」

屋敷に戻ると、ハイテンションなジローが部屋を訪れた。

「おー、滋郎、ありがとな。軽いから助かったわ」

「ふ、ふははは！ もう先輩のためなら何でも作るつす！ 参考
になりそうな魔術書選んで来ましたから何でもリクエストしてほし
いっす！ 無双しましよう、無双！」

ジローがどさりと本を積み上げる。

つうかどんだけ持つて来てんの。

その中の一冊をペラペラと捲る。

時の魔術とか空間魔術とか飛空魔術とか中々面白そだ。

斜め読みだし詳しく述べはわからないが、猫型ロボットの道具とか再現

出来そうだ。

「まあそのうち読むけどさ。……俺今欲しいものがあるんだよね」

「え？ 何すか？」

「電気」

「え？」

「電気」

「……え？」

ジローが武器防具関係の開発のことを言つてゐるのはわかっている。
だがそこはあえて空氣を読まない。

今一番欲しいものは電気だ、まずそれを開発してほしい。

電気といつても電気そのものが欲しいわけではなく、単純に魔動石の補充が面倒、それだけだ。

「ええー……電気って……電線引いたり家電作つたりー……？」

「それなんだけどさ。魔動石を魔力に変換つて出来ないわけ？」

「え？」

「魔法使つ時は魔力使つだろ？ 魔動具使つ時は魔動石。似たようなもんじゃん？」

「その発想はなかつた……ツ！」

ジローは一人ぶつぶつと呟き始めた。

おそらく何か考えているのだろうと放置する」として、マチルダにお茶を貰つ。

「ん……魔動石の魔力化、出来そうつす！」

「おー」

「電線ならぬ動線かー……中継作つて飛ばす方法を考えた方が早い

か……」

「おー」

「どつちにしろ大掛かりになるなあ。ヒティさんに企画書出してみるつす！」

「おー、期待してる」

魔動石補充本^{マジ}気面倒臭い。

「からか客も増え、リピーターもじわじわついてきた今日この頃。

壁絵に反応があるとイグレッシュ・オのテンションがあがる。それを見てお客様さんがちょっとひく。うん、店は今日も平和です。

「あ、グレッツ。今日はテートだからさくっと仕事終わらせたい」そう宣言して、仕込みに集中。

昼頃開店し、夜早めに閉店するので、営業時間は日本の一般的な店に比べて短い。

この世界ではどの店でも大体そうだ。

24時間営業の店は今のところ存在しないし、全体的に労働時間が短い。

「つうわけで、閉店したら上がって良いか?」

「はい。仕込みに問題なければ大丈夫です」

仕込みは問題なし。

元々余裕を持つて仕込んでいるし、仕上げは朝にやっているので構わない。

店側の清掃関連は、イグレッシュ・オが担当している。ジローとキイトが厨房の清掃だ。

仕込みは2人が担当しつつ、イグレッシュ・オにも少しずつ教えていふところで、いずれは厨房に入つてもらい、接客は接客で人員を増やしたい。

そろそろもう一人雇つても良いんじゃないか、と話し合いで中。

販売メインで簡単な製造補助もしてもらひ、ところが今の希望である。

それにジローは城の仕事もあるので、キイトの休みの時や仕事量の多い時にしか出勤しないのだ。

2・5人はさすがに少ない。

厨房の片付けは早めに終わらせ、閉店してすぐにビストロに向かった。

ターシャに奥の席へ通される。

「今日は？」

「リゲルとデート」

商品の搬入などでターシャとは度々顔を合わせており、今では色々と雑談する仲になつていて。

特にリゲルに関してよく話す。

お勧めのデータースポットや人気のあるプレゼント、城下町の流行などを教えてもらつていて、

あまり活かせていないのが残念だ。

「どう？ 上手くいつてる？」

「ばちばちかな。データには応じてくれるよになつたし」

今回リゲルを誘つたとき、マコトも誘いたい、と言わなかつたのだ。これは一歩進んだのではないかと、そう思つていて。

実際のところ、マコトが休みでないことを知つていて言わなかつた可能性もあるのだが。

「そろそろこいつ、決定的な一步が欲しいわよね。やっぱりプレゼントト？」

花や宝石、小物などの流行に話題は移り、しばらくしてからリゲルがやつて來た。

「すまない、遅くなつた」

「いや、大丈夫。忙しかつたのか？」

「ああ……」

向かいに座るとターシャが飲み物を運んで来た。

微発泡のベリージュース。

食べ物を注文し、乾杯。

「ピグウ討伐はどうだった?」

「ピグウはまあ特に何もなかつたかな。あ、走竜に初めて乗つたん

だけど、良いな」

「そうか。走竜は従順で扱いやすいからな。、やはり人気がある。これからも接する機会はあるだろう」

「俺には最初、反抗的だつたけどな。警戒してただけかもしないけど

「警戒はしないと思うが……。城の走竜は人によく懷いている

「俺がよっぽど胡散臭かつたのか……」

ちょっと落ち込む。

もしかしたら異世界人だから、ということかもしれない。

ジローが走竜に乗つたら聞いてみよう。

香ばしいチキングリルにさくつとしたオニオンフライ。クリーミーなマッシュポテト、具沢山トマトスープ。

食事をしつつ、城に残つたメンバーの近況や戦況などを聞く。大きな変化はないようだ。

「キイトは最近、何があるか?」

「そうだなあ、今は紙をもつと安く手に入れたいと思つてるんだけどさ」

「紙?」

「お菓子を包むときに使う、柄をつけた紙っていうか……」

紙が安くなれば、厚紙で出来た箱にケーキを入れるといふことも出来る。

どのケーキ屋もあまり紙やフィルムを使っていないので、崩れやすいのだ。

消費者側もそれが当然だと思っていて気にしていないが、やはり崩

れににくい方が良い。

「紙か……紙を使うことがあまりないから、生産量も少ない
「紙の使用が増えれば安くなる?」

「あるいは

「そうだな……紙と言えば本に包装紙にノートに……
そもそもティッシュがない世界だ。

ティッシュの代わりに布を使い、洗ってまた使つ。
布も安いものではないが、使い捨てではないのでどの家庭にも必
ずある。

城の書類は紙だったが、重要ではないものはボードだった。
城でさえそのだから一般家庭ではますます紙を使つていないと
りつ。

「本ねえ

「魔術師は本をよく持つているがな。そもそも本は高価だから貴族
くらいしか手が出せない」

専門書は読む人を選ぶ。

小説や絵本、漫画なんかは幅広く好まれるだろうが、そもそも低価
格でないと広まっていかないだろう。

「どうしたもんか」

何をするにも資金が必要か。

世知辛い。

ここはエディに集るしかないのか……。

「本が高いのは書き写す労力が掛かるから、といつのもある
書き写す労力。

すなわち手書き?

「写す魔術はない?」

「なくはない。ただ魔力をかなり使つので好まれないといったところか」

なるほど。

魔術を使うくらいなら手作業の方が良いと。

部屋にある魔術書もおそらく手書きなのだろう。

「珍しい魔術だからな。城の魔術書にも載っているかどうか……家に戻ればあると思うが」

「家?」

リダイン

「ああ。私の家だ。隣国との国境に近い山にある」

「ずっと城にいるように見えたが、違ったのか。

キイトの考えが透けて見えたのか、リゲルが付け足す。

「今は城での仕事が多くて城内に部屋を借りているが、普段は山の家に住んでいる。そうだな、戦争が終われば戻ると思うが」

「いいな、行ってみたい。リゲルの家」

「私の家に?」

首を傾げるリゲル。

「そう。ああ、魔術書を貸してくれると嬉しいんだけど」

取つてつけたような理由に苦笑いだ。

「まあいいか。珍しい食材もあるかもしれないし……。そろそろ魔動石の入れ替えに帰らないといけないと思っていたしな。今度の定期日で良いか?」

「もちろん」

リゲルの言葉に上機嫌に頷く。

こうしてリゲルのお宅訪問が決定したのである。

早朝急に城からの遣いがやって来た。

目を擦りながら集合場所である城の広場まで歩く。

走竜の番号札を受け取り、竜舎へ向かつ。

またもや61番。

「おー、よろしくな」

ぼすぼすと撫でると、小さく鳴いた。

「これも何かの縁ってことで、お前は今日からマサムネな
心なしか嬉しそうに鳴き、キイトの手に擦り寄る。
おつと和んでいる場合ではない。

一応緊急討伐なんだつた。

緊急と言いつつも、ちやつかりおやつを持って来る余裕はあつたわ
けだが。

城から南西の方角に、トープという飛行型魔物の大群が現れた。
この魔物はすぐ移動するので、田撃次第早く討伐するようにしてい
るところ。

害がなければ放つておくのだが、この魔物は肉食。
食い尽くすまで獲物の上空を飛び回る。

この魔物に滅ぼされた村もあるというから、中々危険なのだ。
救いなのは空腹時と正当防衛でしか殺生を行わないところか。

そう考えると悪い魔物ではないのだが、やはり人間自分たちの身は
かわいい。

仕方がないことなのだろつ。

走竜に乗り、目撃場所へ急ぐ。

臨時であるキイトは見張り役で、目撃場所付近に一般人や他の魔物が入り込まないように警備する。

森中央の上空に、旋回している魔物が見える。

暗いオレンジ色の大きな魔物。

「ウモリのような羽にトゲがあり、漫画に出てきそつだと的外れな感想を抱ぐ。

旋回している魔物は見張り役で、その下は食事中で、交代する瞬間を狙うらしい。

「変わった形の武器だなー」

「ああ、これ？まあ、そうだな」

突然騎士の一人に話しかけられた。

見張り役って暢気なんだな。

討伐に関係ない話を振られるとは思っていなかつた。

「これはこっちが刃ブレードで、こっちが銃ブローバック……放出になつてゐる」

この世界に銃はない。

弓はかるうじであるが、放出系の魔法があるせいか飛び道具をあまり見ないのだ。

元々銃剣なんてゲーム内でしか見たことがなかつたが、銃がない世界ではこの武器はもつと珍しいだろう。

「へえー。便利そうだねー、オーダーメイド？」

「あー……眼鏡の……」

何と言えば良いのか。

自分から召喚されたなんていふと馬鹿みたいだし、ジローとの騎士が面識があるかどうかわからない。

「あ。開発の臨時職員の眼鏡に作つてもらつた」
開発の臨時職員はジロー一人だ。

ジローを知らないてもその説明で何となく理解してもらえるだらう。

「なるほどー、ね、あとでそれ貸して？ 使ってみたい」

「いいけど、たぶん無理だと思つ」

「……どうこと？」

「……どうこと？」

説明しかけたその時、旋回していた魔物が降下し始めた。

緊張感が走る。

皆無言で、その様子を見守る。

金属音が響き、悲鳴や怒号、一気に騒がしくなる。

始まったのか。

降下してしまえば木々が邪魔で、その様子は窺えない。
見張りは相変わらず他の侵入を許さないことが仕事で、トーペと直接対決はなく。

逃げる時は空を飛ぶので、追いかける術もない。

負傷したトーペが羽ばたき、空を逃げる。

放出系の魔法が飛び交い、仕留めようとするが中々当たらない。
当たったところで丈夫な皮膚を持つトーペは、一撃一撃じや撃ち落せないので。

「あつちは城の方か。大丈夫なのか？」

「んー、どうかなー。どうせまた空腹になつたら狩りを始めるだろうし、そのとき動けば良いんじゃない？ どうせもう魔法が届く距離じゃないし」

普段ならそれはそれで良い、と思いつていたが。

今回は少々違う。

今度の定休日はリゲルの家を訪れる予定なのだ。

そんな美味しい機会を魔物討伐なんかで潰す事になつてみる。

「うん、仕留めようか」

人の恋路を邪魔するやつは滅びると良いく。

まだ邪魔されてないけどな。

銃剣を構える。

「

魔力を込め、魔記号を呴き、想像する。

炎は生まれ、トーペを貫く。

それは心臓を貫き、燃やし、地上に落とし。

「 ; ; 」

連射。

ただ魔力を込めれば使えるが、自分なりにコントロールした方が格段に性能が良い。

それに気付いたのは製作者であるジローではなく、使用者であるキイトだ。

これはジローが作ったものが特別だということではなく。単純に使用者の魔力の込め方、量、操作でどうとでもなる。どんな武器でも使い方次第。

炎はトープを貫き、その身を燃やす。

一匹、また一匹と落下していく様子を、その場にいた者はただ、見ていた。

「……本当に便利な武器だね。ね、貸してー？」

興味津々なその騎士に武器を渡す。

キイトはその間に休憩だ。

木の根元に座り、おやつに持つて来ていた店の売れ残りを取り出す。賞味期限切れというわけではないが、そろそろ引いておくかと思った焼き菓子である。

騎士が刃を出したり銃を発射したりしているのを見学しつつ、まつたり休憩。

やはりというか何と言うか、刃の長さだつたり維持力だつたり、銃の威力だつたり……キイトとは比べ物にならない。改めて自身の魔力量は多いのだなあと実感する。

キイトだけでなく他の4人も同じなのだが、この武器はキイトしか使用していないため、よくわからないのだ。

「すごいね、これ、かなり難しい……って何食べてるのー」

「柚子のパウンドケーキ」

「いやそーじゃなくて……美味しそーだね?」

「食う?」

パウンドケーキを差し出せば、高速で咀嚼し飲み込んだ。

「おいしい。甘いの好きなの？」

「好きつかつか……俺ケーキ屋だから、店の売れ残り」

実際甘いものよりしようっぱいものの方が好きだ。

おやつかごはんかと言われば迷いなく」はんを選ぶ。

「あ、そーか。臨時だつて。……ふーん、ケーキ屋さんなんだ？」

雑談していると、森の中心から騎士達が戻つて来た。

隊長に状況を聞かれ、簡単に答える。

驚かれたが、開発の特注武器だというと納得された。

その後、撃ち落としたトープの死体を確認し、走竜ランドラに乗つて城へと戻る。

これで安心して定休日を待つことが出来るな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3375t/>

ノーグ・コンフェクショナリー

2011年10月14日23時25分発行